

茨城県教育財団文化財調査報告第316集

旧宝幢院跡

一般県道城里那珂線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

きゅう ほう どう いん あと
旧 宝 幢 院 跡

一般県道城里那珂線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 21 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団



旧宝幢院跡遠景



調査区全景

カラー写真図版

序

茨城県は、長期的な展望のもとに県土の基盤整備を行っております。道路網につきましても、ゆとりある社会の実現を目指して、円滑で快適な都市交通の確保を図るべく、積極的に整備を進めているところです。

その一環として、茨城県水戸土木事務所は、東茨城郡城里町那珂西において、一般県道城里那珂線バイパス整備事業を計画しました。

しかしながら、この事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である旧宝幢院跡が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が同事務所から同遺跡の埋蔵文化財発掘調査について委託を受け、平成19年6月1日から同年7月31日までの2か月間にわたってこれを実施しました。

本書は、その調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、城里町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財團法人 茨城県教育財團

理事長 稲葉節生

例　　言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年度に発掘調査を実施した。茨城県東茨城郡城里町那珂西2,378番地の4ほかに所在する**旧宝幢院跡**の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調　　査	平成19年6月1日～平成19年7月31日
整　　理	平成20年5月1日～平成20年6月30日
- 3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	藤田哲也
主任調査員	小川貴行
調　　査　　員	作山智彦
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員作山智彦が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = +51,320m, Y = +50,560mの交点を基準点(A 1 a1)とした。なお、この原点は世界測地形による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」「B 2b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI - 住居跡 SB - 挖立柱建物跡 SA - 横跡 UP - 地下式坑 SD - 溝跡 SF - 道路跡

TM - 塚 SK - 土坑 P - ピット

遺物 P - 土器・陶磁器 TP - 拓本記録土器 Q - 石器・石製品 M - 金属製品

土層 K - 掘乱

3 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社)を使用した。

4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1で掲載した。種類や大きさにより、異なる場合は、それぞれの縮尺をスケールで示した。

(2) 遺物は、原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 = 焼土・軸葉(染付を除く)

 = 窯火床面・埋没谷

 = 窯構築材・粘土・黒色処理

 = 煤

●上器 —— 硬化面

5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

(1) 遺物番号は遺物ごとに通し番号とし、挿図・観察表・写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の()内の数値は現存値を、〔 〕内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m, cm, gで示した。大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に単位を表示した。

(3) 遺物観察表の備考欄は、土器の残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6 壁穴住居跡の主軸は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N-10°-E)。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査経緯.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査経過.....	1
第2章 位置と環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 調査の成果.....	7
第1節 調査の概要.....	7
第2節 基本層序.....	7
第3節 遺構と遺物.....	9
1 古墳時代の遺構と遺物.....	9
(1) 墓穴住居跡.....	9
(2) 土坑.....	11
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	11
(1) 墓穴住居跡.....	11
(2) 土坑.....	16
3 中・近世の遺構と遺物.....	16
(1) 掘立柱建物跡.....	16
(2) 横跡.....	17
(3) 地下式坑.....	19
(4) 溝跡.....	20
(5) 道路跡.....	22
(6) 塚.....	27
4 その他の遺構と遺物.....	31
(1) 溝跡.....	31
(2) 土坑.....	31
(3) ピット.....	33
(4) 遺構外出土遺物.....	34
第4節 まとめ.....	37

写真図版

抄録

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成18年6月12日、茨城県水戸土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道城里那珂線バイパス整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けた茨城県教育委員会は、平成18年6月28日に現地踏査を、平成18年7月12・13日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成18年7月31日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に旧宝幢院跡が所在する旨回答した。また、同年12月13日に別地点の試掘調査を実施したが、遺跡は確認されなかったので、その旨回答した。

平成18年12月26日、茨城県水戸土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘についての通知が提出された。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成19年1月23日、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成19年2月15日、茨城県水戸土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道城里那珂線バイパス整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成19年2月28日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、旧宝幢院跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年6月1日から平成19年7月31日まで、旧宝幢院跡の発掘調査を実施することとなった。

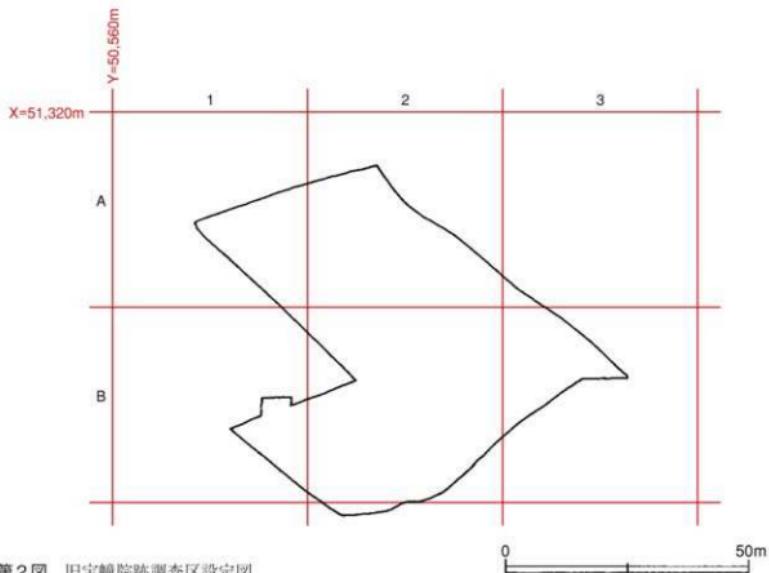
第2節 調査経過

調査は、平成19年6月1日から平成19年7月31日まで実施した。その概要を、表で記載する。

工程	期間	平成19年 6月	7月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注記作業 写真整理			
補足調査 収			



第1図 旧宝幢院跡調査区位置図（城里町都市計画図 2500分の1）



第2図 旧宝幢院跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

旧宝幢院跡は城里町（旧常北町）那珂西台赤羽根に所在している。城里町は、平成17年2月1日に常北町、七会村、桂村の3町村の合併によりできた町で、茨城県のは中央部に位置している。

城里町の地形は、西部が鶴足山地で、東部へ向かって緩斜面の丘陵性山地が広がっている。この山地の東部は河岸段丘や台地となっている。台地部分は、那珂川と西田川に挟まれた那珂西台地、西田川と藤井川に挟まれた十万原台地、藤井川と前沢川に挟まれた上入野台地に細分されている。これらの台地は第3紀層を基盤とし、その上部には第4紀洪積層である疊層、粘土層、鹿沼軽石層、関東ローム層が堆積している¹⁾。なお、当遺跡や前側遺跡²⁾（41）、ニガサワ遺跡³⁾（30）、二の沢A遺跡（28）、ニガサワ古墳群⁴⁾（31）、十万原遺跡⁵⁾（33）の発掘調査では、関東ローム層上で今市・七本桜軽石の堆積が確認されている。台地周辺には、河川の浸食によって形成された沖積地が樹枝状に広がっており、藤井川、西田川などの小河川が那珂川へ注いでいる。

当遺跡は、那珂西台地の東部、西田川左岸の台地端部に立地している。標高は38.5～42.0mである。調査前の現況は畠地、山林である。

第2節 歴史的環境

これまでに周辺の台地上では、分布調査や発掘調査によって多くの遺跡が確認されている。特に西田川右岸では、水戸市藤井町十万原地区の市街地開発事業に伴う調査によって、多くの資料が蓄積され、当地域の歴史を考える上で重要な役割を担っている。以下、調査が行われた遺跡を中心に概観する。

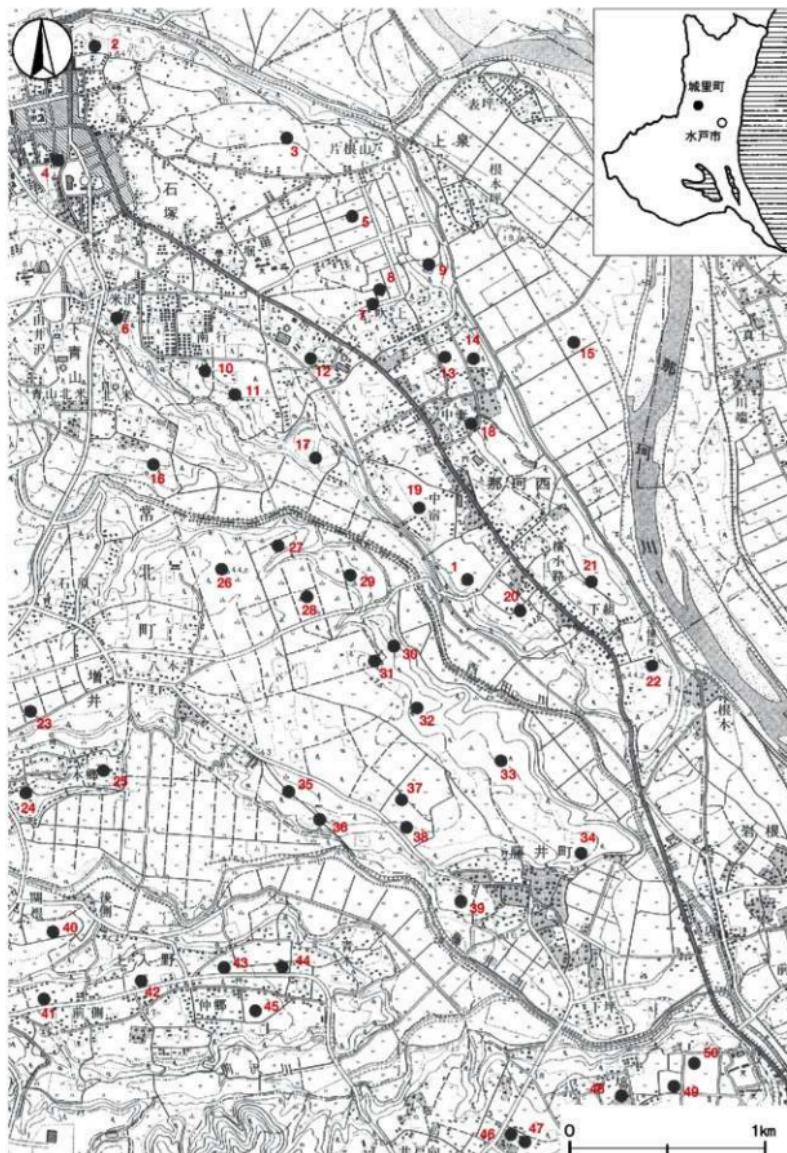
旧石器時代では、上入野遺跡（45）で3基の土坑が確認され、うち最も古い第16号土坑は約32,000年前という年代が与えられている²⁾。十万原遺跡では、石器集中地点と集石土坑が確認され、スクレイバーや台石などが出土している。

縄文時代になると、二の沢A遺跡や二の沢B遺跡（29）では、早期末から前期初頭の堅穴住居跡が⁴⁾、十万原遺跡では早期、中期、後期の堅穴住居跡が確認されている。隣接するこれらの遺跡の調査によって、西田川の右岸では早期から集落が営まれていることが判明した。また、藤井川と前沢川に挟まれた舌状台地に位置する後側遺跡（42）では、中期の堅穴住居跡などが確認されている²⁾。この他、中妻遺跡（14）、片根山遺跡（旧片山遺跡）（3）などで遺物の散布が見られる¹⁾。

弥生時代の遺跡としては、二の沢A遺跡、二の沢B遺跡、ニガサワ古墳群、十万原遺跡や、藤井川と前沢川に挟まれた舌状台地に位置する上入野遺跡などがある。

弥生時代に営まれた集落は、古墳時代前期になり最盛期を迎える。二の沢A遺跡、ニガサワ遺跡、上入野遺跡など前期の集落跡からはS字甕が出土しており、東海地方との関わりがうかがえる。中期には十万原遺跡で鍛冶工房跡が確認され、鉄滓、鍛造剥片、羽口、砥石等が出土している。

ニガサワ古墳群では、6世紀後半から7世紀前半にかけて、5基の古墳が構築されている。第2号墳は全長31.0mの前方後円墳で、主体部は横穴式木室である。轡、直刀、鐵鏃などが出土しており、6世紀第4四半期と考えられている。付近には山ノ上古墳群（34）や、藤井川左岸の十万原古墳群（35）、清水台古墳群（37）、



第3図 旧宝幢院跡周辺遺跡分布図（国土地理院25,000分の1「石塚」）

表1 旧宝幢院跡周辺遺跡一覧表

番号	道路名	時代						番号	道路名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世
①	旧宝幢院跡			○	○	○	○	○	26	ポンポン遺跡	○	○	○	○		
2	石塚城跡					○			27	ドウゼンクボ遺跡	○	○	○	○	○	
3	片根山遺跡	○	○		○				28	二の沢A遺跡	○	○	○	○		
4	石塚古墳群			○					29	二の沢B遺跡	○	○	○	○		
5	荒神道跡			○					30	ニガサワ遺跡	○	○	○	○		
6	南行A遺跡			○					31	ニガサワ古墳群	○	○	○			
7	吹上遺跡			○					32	駒形端古墳群				○		
8	吹上古墓			○					33	十万原遺跡	○	○	○	○	○	○
9	富士山遺跡			○					34	山ノ上古墳群				○		
10	南行B遺跡			○					35	十万原古墳群				○		
11	南行C遺跡			○					36	南駒形遺跡	○	○	○	○		
12	西大堀遺跡			○					37	清水台遺跡	○		○	○		
13	中妻台遺跡			○	○				38	清水台古墳群			○			
14	中妻遺跡	○		○	○				39	藤井町遺跡	○	○				
15	外ノ内・天神遺跡	○	○	○	○				40	関根遺跡	○		○	○	○	
16	北米遺跡			○					41	前惆遺跡	○		○	○		
17	作内館跡				○				42	後惆遺跡	○	○	○	○	○	
18	中妻南遺跡			○					43	仲郷遺跡	○	○	○	○	○	
19	赤羽根遺跡			○					44	青木遺跡	○		○	○	○	○
20	西原遺跡			○					45	上入野遺跡	○	○	○	○	○	
21	那珂西遺跡	○	○	○	○				46	鳴沢大塚古墳群			○	○		
22	那河西城跡				○				47	鳴沢大塚遺跡	○		○	○		
23	中道遺跡	○							48	神生館跡					○	
24	増井古墳			○					49	塔古墳群				○		
25	増井本郷遺跡	○	○	○	○				50	塔東遺跡	○					

増井古墳（24）なども存在している¹⁾。この他、古墳時代終末期の集落として那珂西遺跡（21）が挙げられる⁶⁾。

古代の当地域は、那珂郡入野郷に比定されている。平安時代になると、西田川右岸では二の沢A遺跡、二の沢B遺跡、ニガサワ遺跡などの集落が再び形成される。遺跡の分布状況から、奈良・平安時代の遺跡数が増加していることがうかがえる。二の沢B遺跡では、他郷名の刻書が施された石製紡錘車が出土している。前側遺跡では、9世紀代の庇を持つ掘立柱建物跡の存在が確認されている。

中世になると、十万原遺跡では火葬施設や墓壙が検出されており、墓域として利用されていることが判明している。関根遺跡（40）では、渡来銭37,350枚が出土したといわれている¹⁾。資料の流出により全体は不明であるが、北宋銭が多くを占め、最新銭は元銭で1310年初鑄の至大通宝である。明銭が認められないことから、室町時代初期のものと考えられている。

当地域には中世の城館跡が多く存在している。当時、常陸大掾氏、那珂氏、佐竹氏などが抗争を繰り広げており、一族や家臣の城館が築かれていた。仲郷遺跡（43）では、鎌倉時代の土塁から鎧の小札がまとまって出土しており⁷⁾。戦乱の世を物語る資料となっている。青木遺跡（44）では堀跡が検出され、13世紀から14世紀頃の城館の存在が明らかとなった²⁾。那珂西城跡（22）の城主は、大中臣姓の那珂時久、または秀郷流藤原姓の那珂通辰とする説がある。時久は鎌倉時代、通辰は南北朝争乱期の人物である。なお、後の1696(元禄9)年には、廢城となった那珂西城に宝幢院が移転し、今日に至っている。石塚城跡（2）は室町時代に活躍した佐竹義篤の子、石塚宗義の居城といわれる。

当地域で勢力を伸ばした佐竹氏だが、1602(慶長7)年、徳川家康に秋田への国替えを命じられる。その際に城領は接収され、石塚城も廢城になったといわれる。これによって、当地域は宍戸藩領、後に水戸藩領となっている。

* 文中の（ ）内の番号は、表1及び第3図の該当番号と同じである。

註

- 1) 常北町史編さん委員会「常北町史」常北町 1988年3月
- 2) 池田晃一「主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 上入野遺跡 青木遺跡 後側遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第108集 1996年3月
- 3) 小林孝「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ ニガサワ遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第169集 2000年3月
- 4) 江幡良夫 黒澤秀雄「十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 二の沢A遺跡 二の沢B遺跡(古墳群) ニガサワ古墳群」「茨城県教育財团文化財調査報告」第208集 2003年3月
- 5) 菅川修「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 十万原遺跡1」「茨城県教育財团文化財調査報告」第179集 2001年3月
宮田和男「都市計画道路藤井橋十万原線改正好工事地内埋蔵文化財調査報告書 十万原遺跡2」「茨城県教育財团文化財調査報告」第193集 2002年3月
- 6) 河野一也 河野真理子「那珂西遺跡」「城里町埋蔵文化財発掘調査報告」第1集 2005年9月
- 7) 仙波亨「主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 仲郷遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第124集 1997年6月

参考文献

茨城県教育庁文化課「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 2001年3月

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

当遺跡は、那珂西台地の東部、西田川左岸の台地端部に立地している。調査面積は3,838m²で、調査前の現況は畑地、山林であった。

調査の結果、堅穴住居跡3軒（古墳時代1、奈良・平安時代2）、掘立柱建物跡1棟（中世）、横跡3列（中世）、地下式坑1基（中世）、溝跡4条（中世2、時期不明2）、道路跡5条（中・近世）、塚1基（中世）、土坑11基（古墳時代1、奈良・平安時代1、時期不明9）、ピット8か所（時期不明）が確認できた。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に5箱出土している。主な遺物は、土師器（壺・甕・瓶）、須恵器（壺・甕・甕）、土師質土器（小皿・火鉢・内耳鍋）、陶器（碗・皿・鉢・甕）、磁器（皿）、石器（石鏃・打製石斧・砥石）、石製品（碁石）、古銭（寛永通宝）などである。

第2節 基本層序

調査区西部のB1a0区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った（第4図）。この地点は斜面に面した台地上である。層序は、以下の通りである。

第1層は、黒色を呈する耕作土層で、層厚は50～77cmである。

第2層は、赤褐色を呈する今市・七本桜軽石層で、粘性・締まりともに弱い。層厚は12～24cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性が強い。層厚は10～12cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性が強い。層厚は45～60cmである。

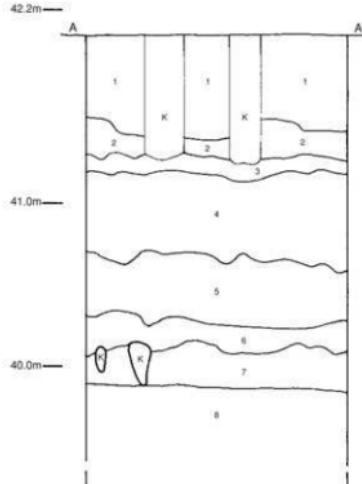
第5層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりが強い。層厚は30～44cmである。

第6層は、黄褐色を呈するハードローム層で、締まりが極めて強い。層厚は8～24cmである。第7層から第5層への漸移層である。

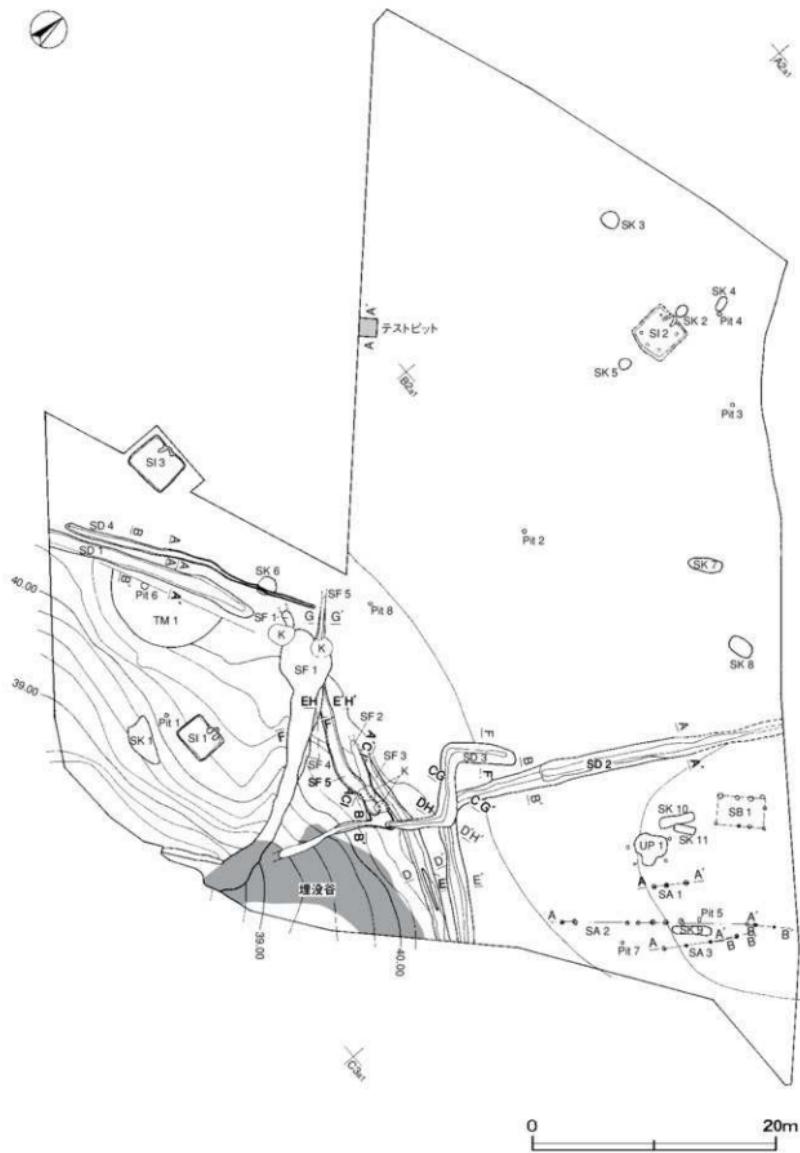
第7層は、明黄褐色を呈する鹿沼軽石層で、締まりが強い。層厚は17～30cmである。

第8層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性が極めて強い。層厚は下層が未掘のため不明である。

なお、遺構は第2層上面で確認している。



第4図 基本土層図



第5図 旧宝幢院跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構として、堅穴住居跡1軒、土坑1基が確認できた。以下、遺構と遺物について記述する。

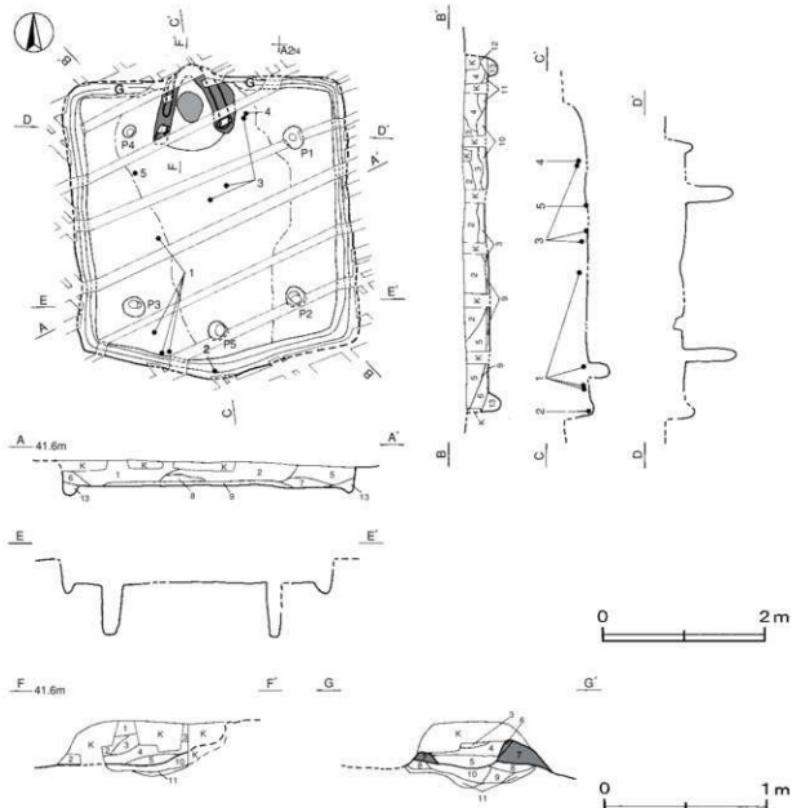
(1) 堅穴住居跡

第2号住居跡（第6・7図）

位置 調査区北部のA 2f3区、標高41.4mの台地上に位置している。

規模と形状 長軸3.65m、短軸3.42mの方形で、主軸方向はN-6°-Wである。南壁中央部がやや張り出している。壁高は25~34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P5から竈にかけての中央部が硬化している。壁溝が全周している。



第6図 第2号住居跡実測図

窓 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで106cm、燃焼部幅45cmである。袖部はロームブロックや砂質粘土で構築されている。また、焚口部の両袖には、砂岩が補強材として使用されている。火床面は床面とはほぼ同じ高さで、赤変硬化している。煙道部は搅乱されている。

土層解説

1 黒 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 黒 褐 色	ロームブロック多量、砂質粘土粒子中量
2 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量	8 黒 褐 色	ロームブロック多量、今市七本桜バミス中量
3 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量	9 黒 褐 色	ロームブロック多量、今市七本桜バミス微量
4 暗 赤 褐 色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量	10 暗 赤 褐 色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
5 暗 赤 褐 色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量	11 暗 褐 色	ロームブロック多量
6 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量		

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ55～69cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ28cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

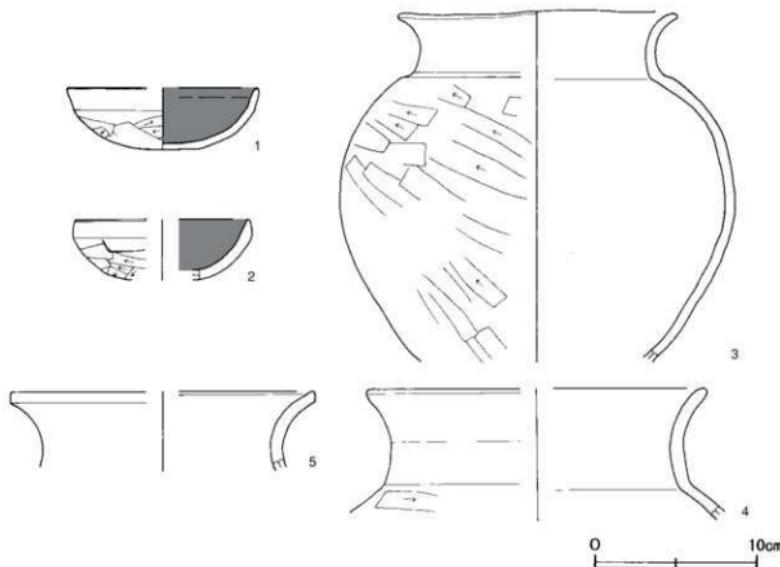
覆土 13層に分層できる。ロームブロック、焼土粒子などを含む堆積状況で、人為堆積である。

土層解説

1 黒 褐 色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	8 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量
2 黒 褐 色	ローム粒子微量	9 暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	10 黒 褐 色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量
4 黒 褐 色	ローム粒子少量	11 黒 褐 色	ローム粒子中量
5 黒 褐 色	ローム粒子少量	12 黒 褐 色	ロームブロック中量、今市七本桜バミス微量
6 黒 褐 色	ローム粒子中量	13 暗 褐 色	ロームブロック中量
7 黑 褐 色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師器片145点（坏10・甕135）が出土している。1・2は南壁付近の覆土下層から、3は窓前の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴は	出土位置	備考
1	土師器	杯	[11.6]	3.8	-	長石	褐	普通	体部外側へラ削り後磨き	覆土下層	60% PL.5
2	土師器	杯	[10.6]	3.7	-	長石	にぶい黄褐色	普通	体部外側へラ削り後磨き	覆土下層	30%
3	土師器	甕	[16.9]	[21.6]	-	長石・黒母	にぶい赤褐色	普通	体部外側へラ削り	床面	30% PL.5
4	土師器	甕	[20.6]	[28.1]	-	長石・石英・黒母・粗粒	にぶい褐	普通	体部外側へラ削り	覆土下層	10%
5	土師器	甕	[18.6]	[4.8]	-	長石・石英・黒母・焼化鉄粒子	褐	普通	口脇部面取り	床面	5%

(2) 土坑

第3号土坑（第8図）

位置 調査区南部のA 2e1区、標高41.4mの台地上に位置している。

規模と形状 長径1.52m、短径1.30mの楕円形で、長径方向はN-75°-Eである。深さは35cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

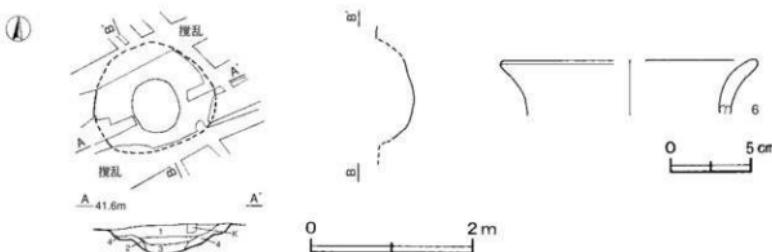
覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積から自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・今市七本桜バミス微量
2 黒褐色 ローム粒子少量3 黒褐色 ロームブロック少量
4 褐褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片1点（甕）が出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀代と考えられる。



第8図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴は	出土位置	備考
6	土師器	甕	[15.4]	[3.3]	-	長石・黒母	にぶい褐	普通		覆土中	5%

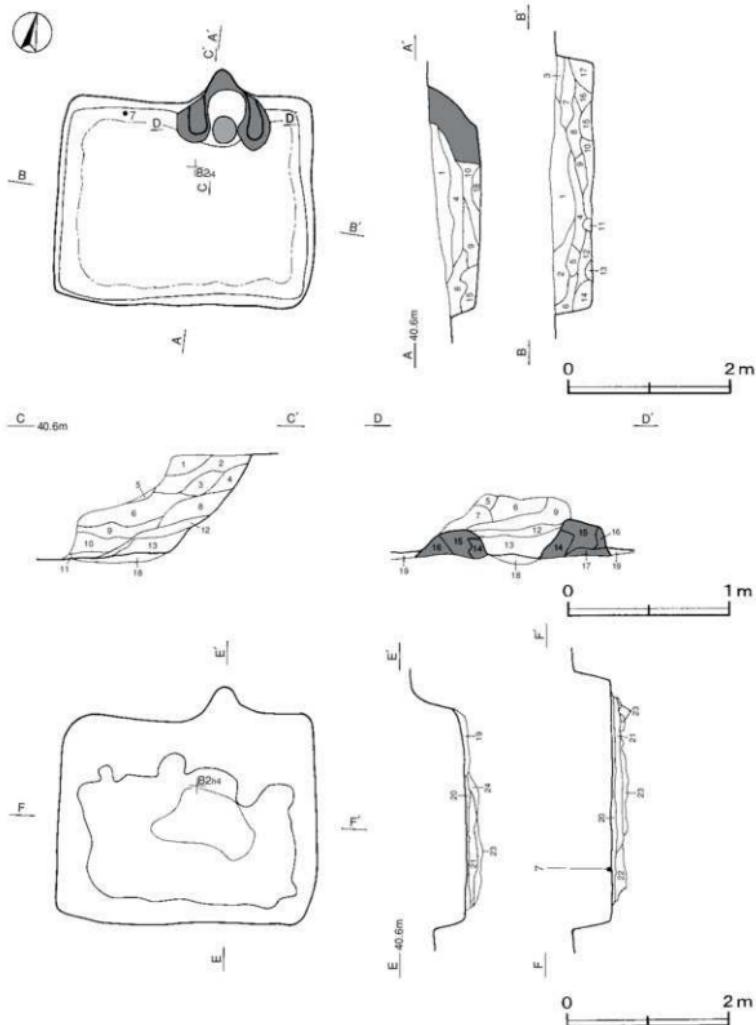
2 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構として、竪穴住居跡2軒、土坑1基が確認できた。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第9・10図）

位置 調査区南部のB 2i4区、標高40.5mの緩斜面部に位置している。



第9図 第1号住居跡実測図

規模と形状 長軸3.20m、短軸2.58mの長方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は38~48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、壁際を除いて硬化している。掘り方は中央部へ向かって浅く掘り込まれている。

竈 北壁の東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで96cm、燃焼部幅33cmである。第14～17層は袖部であり、粘土ブロックを主体として強固に構築されている。火床面は床面とはほぼ同じ高さで、赤変硬化している。煙道部は壁外に35cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。覆土には天井部の崩落による粘土ブロックが含まれる。第18層は掘り方への埋土、第19層は貼床構築土である。袖部を構築後、床を構築している。

電土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子微量	11 黒 褐 色 煙土粒子中量、ローム粒子少量
2 黒 褐 色 ロームブロック微量	12 黒 褐 色 ローム粒子・煙土粒子少量、炭化粒子微量
3 黒 褐 色 ロームブロック微量	13 褐 褐 色 煙土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
4 黄 褐 色 ローム粒子多量、粘土ブロック・粘土粒子微量	14 暗赤 褐 色 煙土粒子多量、粘土ブロック・ローム粒子中量
5 黑 黑 色 ローム粒子・燒土粒子中量、粘土ブロック微量	15 明黄 褐 色 粘土ブロック多量、ローム粒子少量
6 褐 褐 色 ロームブロック多量、粘土ブロック少量	16 黄 褐 色 粘土ブロック多量、ローム粒子中量
7 黄 褐 色 粘土ブロック・燒土粒子多量、ローム粒子中量	17 にい黄褐色 粘土ブロック多量、ローム粒子中量
8 黄 褐 色 粘土ブロック・ローム粒子中量、燒土粒子少量	18 暗赤褐色 烧土ブロック中量
9 暗 褐 海 色 ローム粒子中量、燒土粒子・粘土粒子微量	19 黑 褐 色 ロームブロック中量
10 黑 海 色 ローム粒子・燒土粒子少量	

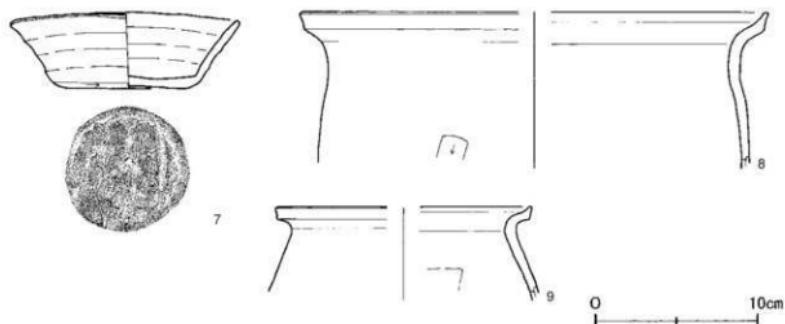
覆土 18層に分層できる。第1・2層は、レンズ状の堆積から自然堆積である。第3～18層は、ブロック状の堆積から人為堆積である。第19層は窓掘り方への埋土、第20～24層は貼床構築土である。

土層解説

1 黒 色 ローム粒子微量	13 暗 褐 色 ローム粒子中量
2 黒 褐 色 ローム粒子微量	14 黑 褐 色 ローム粒子少量
3 黑 褐 色 ローム粒子微量	15 黑 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
4 黑 褐 色 ロームブロック少量	16 黑 褐 色 ロームブロック少量
5 黑 褐 色 ローム粒子少量	17 黑 褐 色 ローム粒子中量
6 黑 褐 色 ローム粒子少量	18 暗 褐 色 ローム粒子多量
7 黑 褐 色 ロームブロック少量	19 暗赤褐色 烧土ブロック中量
8 黑 褐 色 ローム粒子少量	20 黑 褐 色 ロームブロック中量
9 黑 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	21 暗 褐 色 ロームブロック多量、鹿沼バミス少量
10 黑 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	22 海 色 ロームブロック多量
11 暗 褐 色 ローム粒子中量	23 黑 褐 色 ロームブロック多量、鹿沼バミス少量
12 黑 褐 色 ロームブロック少量	24 黑 褐 色 ロームブロック・鹿沼バミス中量

遺物出土状況 土師器片18点（甕）、須恵器片11点（坏10・甕1）が出土している。7は北壁際の床面から正面で出土している。

所見 内部にピットを有しない住居跡である。時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第10図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴は	出土位置	備考
7	灰陶器	环	13.9	4.7	7.4	長石・石英・薄 褐色針	灰	良好	体部下端到板へラ削り 基部回転へラ切り後 ナフ	床面	100% PL.5
8	土罐器	甕	[28.5]	(9.6)	-	長石・石英・薄 褐色	明麗	普通	体部外縁へラ削り	覆土中	10%
9	土罐器	甕	[15.6]	(5.7)	-	長石・石英・薄 褐色	にふい黄褐	普通	体部外縁へラ削り 内面へラナデ	覆土中	5%

第3号住居跡（第11・12図）

位置 調査区南部のB 1f9区、標高40.9mの台地端部に位置している。

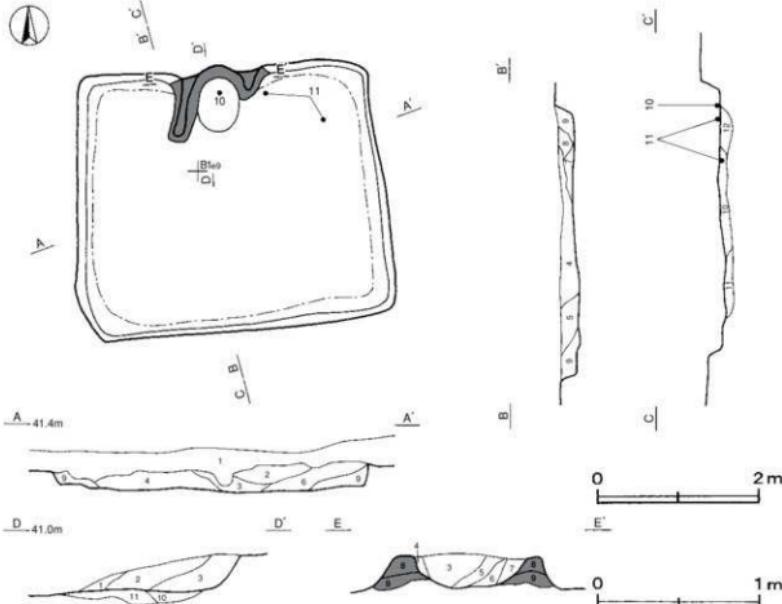
規模と形状 長軸3.80m、短軸3.25mの長方形で、主軸方向はN - 0°である。壁高は18~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床である。床質は軟弱で、壁際を除いた中央部がやや踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで82cm、燃焼部幅54cmである。右袖は焚口部が欠失している。第8・9層は袖部である。火床部は床面とはほぼ同じ高さであり、やや赤変している。煙道部は壁外に3cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。第10・11層は掘り方への埋土である。

竈土層解説

1 黒	褐	色	ロームブロック・粘土ブロック中量	燒土粒子微量	7 焼	褐	色	ローム粒子・粘土粒子中量	燒土粒子微量
2 焼	褐	色	ロームブロック・粘土ブロック・燒土粒子微量	-	8 明	黄	褐	ロームブロック・粘土ブロック多量	-
3 焼	褐	褐色	ロームブロック・燒土ブロック・粘土ブロック少量	-	9 焼	褐	色	ロームブロック中量	粘土ブロック少量
4 焼	褐	色	ロームブロック・粘土ブロック・燒土粒子少量	-	10 焼	褐	色	燒土粒子少量	ロームブロック微量
5 焼	褐	色	ロームブロック・燒土ブロック・粘土粒子少量	-	11 焼	褐	色	ローム粒子・燒土粒子微量	-
6 焼	褐	色	ローム粒子中量	燒土粒子少量					



第11図 第3号住居跡実測図

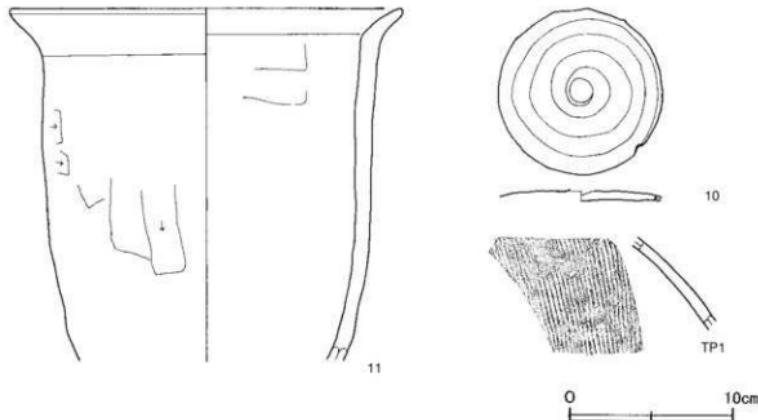
覆土 9層に分層できる。旧表土面からの掘り込みは確認できなかった。レンズ状の堆積から自然堆積である。第10~12層は貼床構築土である。

土層解説

1 黒褐色 表土	7 黄褐色 色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子少量、今市七本桜バミス微量	8 黑褐色 色	ロームブロック・粘土ブロック少量
3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	9 黑褐色 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
4 黒褐色 ロームブロック・今市七本桜バミス微量	10 黑褐色 色	ロームブロック・今市七本桜バミス少量
5 暗褐色 ロームブロック少量	11 暗褐色 色	ロームブロック・今市七本桜バミス少量
6 黒褐色 ロームブロック微量	12 暗褐色 色	ロームブロック・今市七本桜バミス少量

遺物出土状況 土師器片10点(甕9・瓶1)、須恵器片7点(坏4・蓋1・甕2)が出土している。10は窓燃焼部から、11は竈脇の床面から出土している。

所見 内部にピットを有しない住居跡である。時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第12図)

番号	種別	断面	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	須恵器	甕	-	(0.7)	-	長石・石英	灰	良好	面部回転ヘラ削り 窓部周縁を円盤状に整形	窓燃焼部	50% PL.5
11	土師器	瓶	23.8	(21.6)	-	長石・石英	褐	普通	底部外側ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	40% PL.5

番号	種別	断面	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP1	須恵器	甕	長石	灰白	普通	外唇部位の平行叩き目	覆土中	5%

表2 奈良・平安時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸	壁高 (cm)	床面	壁構	内部施設			壁上	出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)
								主軸穴	出入口 ピット	窓				
1	B 2+4	N-4°-W	長方形	3.20×2.58	38~48	平坦	-	-	-	1	-	土師器、須恵器	8世紀後半	
3	B 1+9	N-0°	長方形	3.80×3.25	18~28	平坦	-	-	-	1	-	自然	土師器、須恵器	8世紀後半

(2) 土坑

第1号土坑 (第13図)

位置 調査区南部のB 2j3区、標高40.0mの緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径4.10m、短径1.91mの楕円形で、長径方向はN-73°-Wである。深さは20cmで、平坦な底面である。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積から自然堆積である。

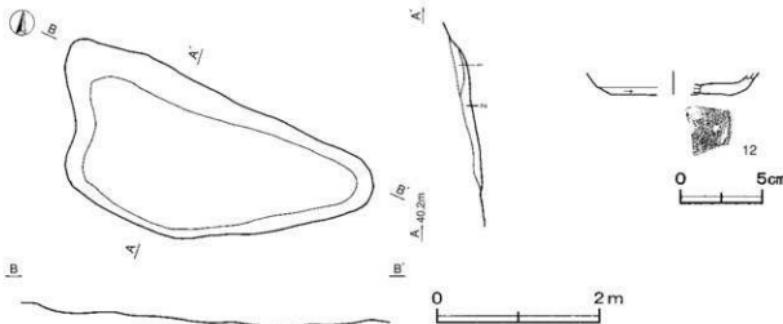
土層解説

1 級 黄褐色 ローム粒子中量

2 級 黄褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミス微量

遺物出土状況 須恵器片1点(坏)が出土している。

所見 時期は、出土土器から奈良・平安時代と考えられる。



第13図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	基種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
12	須恵器	坏	-	(1.4)	[7.4]	長石	灰オリーブ	良好	体部下端凹板ヘラ削り	覆土中	5%

3 中・近世の遺構と遺物

当時代の遺構として、掘立柱建物跡1棟、横跡3列、地下式坑1基、溝跡2条、道路跡5条、塹1基が確認できた。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第14図)

位置 調査区東部のB 3a2区、標高41.6mの台地上に位置している。

規模と構造 衍行3間、梁行2間の側柱建物跡で、衍行方向はN-47°-Eである。規模は衍行3.90m、梁行2.40mで、面積は9.36m²である。柱間寸法は、衍行が0.9m(3尺)~1.8m(6尺)、梁行が0.9m(3尺)~2.4m(8尺)で、柱筋は不揃いである。

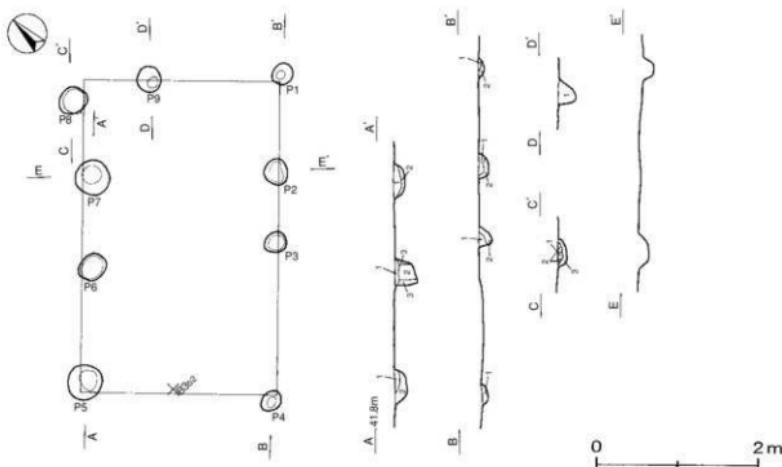
柱穴 9か所。円形で、深さは8~29cmである。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は埋土である。

土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子少量
2 黒 棕 色 ローム粒子・今市七本桜バミス中量

- 3 黒 棕 色 ローム粒子・今市七本桜バミス多量

所見 時期は、柱穴の規模と形状から中世と考えられる。また、隣接する第2号横跡、第3号溝跡と方向が類似することから、これらの遺構と同時期に機能していた可能性がある。



第14図 第1号掘立柱建物跡実測図

(2) 横跡

第1号横跡 (第5・15図)

位置 調査区東部のB3c2区、標高41.5mの台地上に位置している。

規模と構造 柱穴3か所が2.65mの距離で、N-35°-E方向に並んでいる。柱間は北から1.63m、1.02mである。

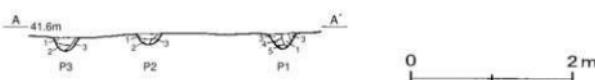
柱穴 円形で、深さは13~17cmである。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3~5層は埋土である。

土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子少量、今市七本桜バミス微量
2 黒 棕 色 ローム粒子中量、今市七本桜バミス微量
3 暗 棕 色 ローム粒子・今市七本桜バミス中量

- 4 黒 棕 色 ローム粒子少量、今市七本桜バミス微量
5 黒 棕 色 ローム粒子中量、今市七本桜バミス微量

所見 時期は、柱穴の規模と形状から中世と考えられる。また、隣接する第3号横跡、第2号溝跡、第1号地下式坑周囲のピットの方向と類似することから、これらの遺構と同時期に機能していた可能性がある。



第15図 第1号横跡実測図

第2号柵跡（第5・16図）

位置 調査区東部のB 3b4～B 3e1区、標高41.5mの台地上に位置している。

規模と構造 柱穴10か所が17.20mの距離で、N-42°-E方向に並んでいる。柱間は、搅乱のため柱穴が確認できない部分もあるが、0.72～1.53mである。

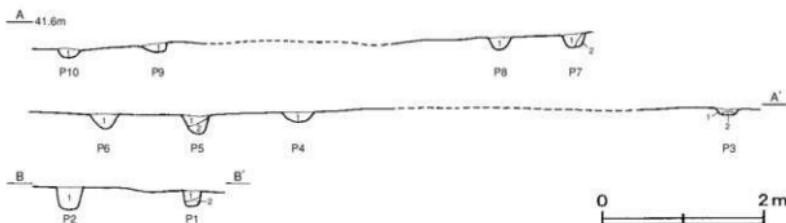
柱穴 円形または梢円形で、深さは8～26cmである。第1・2層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 黒 色 今市七本桜バミス少量。ローム粒子微量

2 黒 褐 色 今市七本桜バミス中量。ローム粒子少量

所見 時期は、柱穴の規模と形状から中世と考えられる。また、隣接する第1号柵立柱建物跡、第3号柵跡の方向と類似することから、これらの遺構と同時期に機能していた可能性がある。



第16図 第2号柵跡実測図

第3号柵跡（第5・17図）

位置 調査区東部のB 3c4～B 3d3区、標高41.5mの台地上に位置している。

規模と構造 柱穴4か所が6.00mの距離で、N-32°-E方向に並んでいる。柱間は北から2.21m、2.04m、1.75mである。

柱穴 円形または梢円形で、深さは22～56cmである。第1～3層は柱抜き取り後の覆土である。

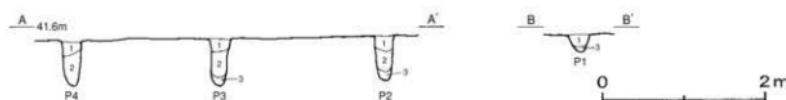
土層解説

1 黒 色 ローム粒子少量

2 黒 褐 色 ローム粒子中量。今市七本桜バミス少量

3 黒 褐 色 ローム粒子多量。今市七本桜バミス少量

所見 時期は、柱穴の規模と形状から中世と考えられる。また、隣接する第1号柵跡、第2号柵跡、第1号地下式坑周囲のピットの方向と類似することから、これらの遺構と同時期に機能していた可能性がある。



第17図 第3号柵跡実測図

表3 中世柵跡一覧表

番号	位置	主軸方向	規模 (m)	柱間 (m)	柱穴			出土遺物	新旧關係 (旧→新)
					数	平面形	深さ(cm)		
1	B 3c2	N-35°-E	2.65	1.02-1.63	3	円形	13-17		
2	B 3c4	N-42°-E	17.20	0.72-1.53	10	円形、椭円形	8-26		
3	B 3c4	N-32°-E	6.00	1.75-2.21	4	円形、椭円形	22-56		

(3) 地下式坑

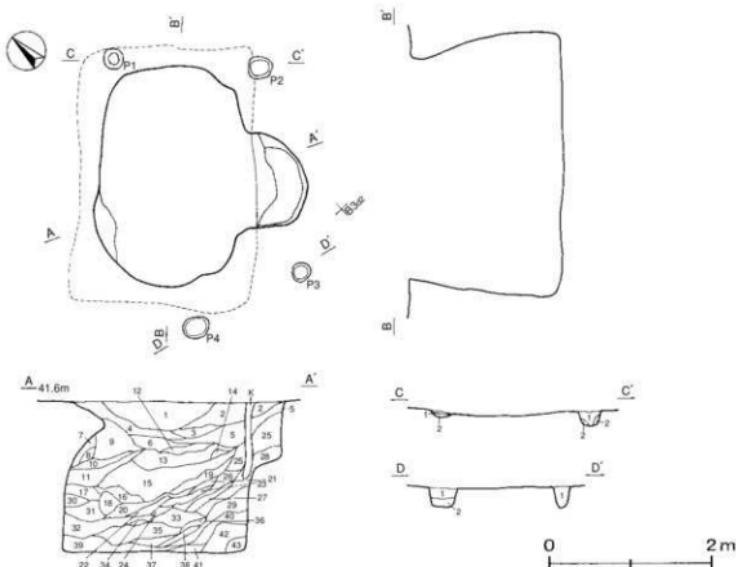
第1号地下式坑（第18・19図）

位置 調査区東部のB 3c1区。標高41.5mの台地上に位置している。

豊坑 主室南壁の中央部に構築されている。形状は長軸1.16m、短軸0.40mの半円形である。壁高は70cmで直立し、底面は主室に向かって傾斜している。

主室 形状は長軸3.20m、短軸2.16mの長方形で、長軸方向はN-43°-Eである。天井部は椭円形に崩落している。深さは184cmで、鹿沼バシス層下のハードローム層まで掘り込まれている。壁は底面から154cmの高さで内傾しており、天井部の痕跡と考えられる。底面は平坦である。

覆土 43層に分層できる。レンズ状の堆積から自然堆積である。第17・18・31・33・35・39・42・43層は、ロームブロックや今市・七本桜バシスを多く含む、天井部の崩落土である。



第18図 第1号地下式坑実測図

土層解説

1	黒	色	ローム粒子微量	23	黒	褐	色	ローム粒子微量
2	黒	色	ローム粒子少量	24	黒	褐	色	ローム粒子・今市七本桜バミス少量
3	黒	褐	ローム粒子微量	25	黒	褐	色	ロームブロック・今市七本桜バミス中量
4	黒	褐	ローム粒子微量	26	黒	褐	色	ロームブロック中量・今市七本桜バミス少量
5	黒	褐	粘土ブロック多量、ローム粒子少量	27	黒	褐	色	ロームブロック中量・今市七本桜バミス少量
6	黒	色	ローム粒子微量	28	黒	褐	色	ロームブロック・今市七本桜バミス多量
7	黒	褐	ローム粒子多量、今市七本桜バミス中量	29	黒	褐	色	ローム粒子多量、今市七本桜バミス少量
8	黒	褐	ローム粒子多量	30	黒	褐	色	ローム粒子少量
9	黒	褐	ローム粒子少量	31	黄	褐	色	ロームブロック多量
10	黒	褐	ローム粒子微量	32	黒	褐	色	ロームブロック・今市七本桜バミス少量
11	黒	褐	ローム粒子微量	33	暗	褐	色	ローム粒子・今市七本桜バミス多量
12	黒	褐	ロームブロック少量	34	暗	褐	色	ローム粒子微量
13	黒	褐	ローム粒子微量	35	黄	褐	色	ロームブロック多量
14	黒	色	ローム粒子微量	36	黑	褐	色	ローム粒子微量
15	黒	褐	ローム粒子微量	37	黑	褐	色	ローム粒子中量
16	黒	褐	ローム粒子微量	38	黑	褐	色	ローム粒子多量、今市七本桜バミス少量
17	黄	褐	ロームブロック・今市七本桜バミス多量	39	褐	黑	色	ロームブロック多量、今市七本桜バミス中量
18	黒	褐	ローム粒子微量、今市七本桜バミス少量	40	褐	黑	色	ローム粒子・今市七本桜バミス少量
19	黒	褐	ロームブロック多量、今市七本桜バミス中量	41	暗	褐	色	ローム粒子多量、今市七本桜バミス少量
20	黒	色	ローム粒子微量	42	褐	色	色	今市七本桜バミス多量、ロームブロック多量
21	黒	褐	ローム粒子中量、今市七本桜バミス少量	43	黄	褐	色	ロームブロック多量
22	褐	色	ロームブロック多量、今市七本桜バミス少量					

ピット 4か所。円形で、深さは8~29cmである。第1・2層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1	黒	色	ローム粒子微量	2	暗	褐	色	ローム粒子多量、今市七本桜バミス中量
---	---	---	---------	---	---	---	---	--------------------

遺物出土状況 陶器片2点(平碗・瓶子)、炭化材片2点が出土しているほか、流れ込んだ土師器片4点(甕)、須恵器片6点(壺2・甕4)が出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形状から15世紀代と考えられる。



第19図 第1号地下式坑出土遺物実測図

第1号地下式坑出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	断面	口径	断高	底径	手法の特徴ほか	胎土色 胎土質	産地・年代	出土位置	備考
13	陶器	平底	【16.0】	(5.7)	-	灰釉 内面トナシ痕	淡黄 浅黄	廻口・須溝系 14世紀後半~15世紀後半	覆土中	25% PL 6
14	陶器	瓶子	-	(4.5)	(9.6)	灰釉	淡黄 灰白 オリーブ灰	廻口・須溝系 14世紀後半~15世紀後半	覆土中	25%

(4) 溝跡

第2号溝跡(第5・20図)

位置 調査区東部のA 3j1~B 2h0区、標高41.5mの台地上に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 L字形状で、B 2f8区から北西方(N-58°W)へ延び、北東方(N-30°E)へ屈曲している。北端は搅乱されているが、東端と同様に調査区域外に延びると考えられる。確認した長さは39.8mで、上幅0.94~2.00m、下幅0.24~0.76m、深さ33~54cmである。北部と屈曲部より東部は、中間部より掘り込みが深い。当初は浅く掘られ、後に深く掘り直されている。断面形はU字形状で、壁は外傾して立ち上がっている。

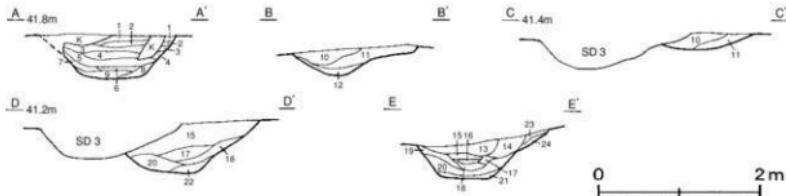
覆土 24層に分層できる。第10~12・23・24層は、当初の溝跡に堆積したもので、レンズ状の堆積から自然堆

積である。その他の層は、掘り直された溝跡の覆土で、ブロック状の堆積から人為堆積である。

土層解説	1 黒褐色 ローム粒子微量	13 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量	14 黒褐色 ローム粒子微量	
3 黑褐色 ローム粒子微量	15 黒褐色 ローム粒子少量	
4 黑褐色 ローム粒子中量	16 黒褐色 ロームブロック多量、今市七本桜バミス微量	
5 黑褐色 ローム粒子少量	17 黒褐色 ローム粒子中量	
6 黑褐色 ローム粒子中量、今市七本桜バミス少量	18 黒褐色 ローム粒子中量	
7 黑褐色 ローム粒子少量	19 黒褐色 ローム粒子少量	
8 黑褐色 ローム粒子少量	20 黑褐色 ローム粒子・今市七本桜バミス多量	
9 黑褐色 ローム粒子少量、今市七本桜バミス少量	21 黒褐色 ローム粒子・今市七本桜バミス多量	
10 黑褐色 ローム粒子微量	22 黒褐色 ローム粒子・今市七本桜バミス多量、ローム粒子中量	
11 黑褐色 ローム粒子微量	23 黒褐色 ローム粒子・今市七本桜バミス少量	
12 黑褐色 ローム粒子・今市七本桜バミス中量	24 黒褐色 ローム粒子多量	

遺物出土状況 土器片5点（坏2・壺3）、須恵器6点（坏2・壺4）が出土しているが、いずれも覆土上層から出土しており、流れ込んだものである。

所見 時期は、重複関係から中世と考えられる。掘り直されているため、底面に高低差があり、区画溝と考えられる。隣接する第1・3号柵跡、第1号地下式坑周囲のピットの方向と類似することから、これらの遺構と同時期に機能していた可能性がある。



第20図 第2号溝跡実測図

第3号溝跡（第5・21図）

位置 調査区東部のB 2d8~B 2g7区、標高41.4mの台地上に位置している。

重複関係 第2号溝跡、第2・3号道路跡を掘り込んでいる。

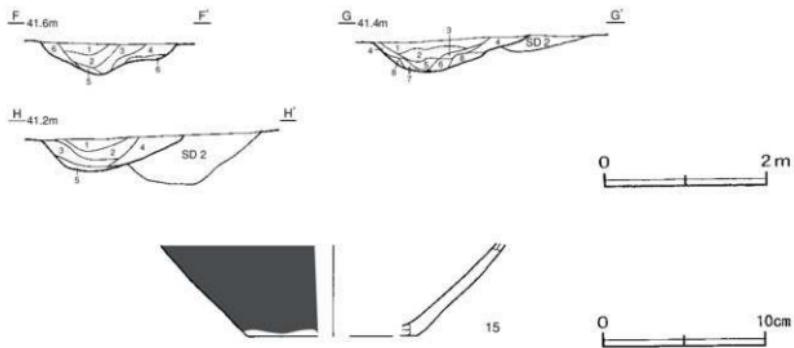
規模と形状 クランク状である。B 2g7区から北東方（N=36°-E）へ延び、B 2f8区で北西方（N=47°-W）へ屈曲し、さらに北東方（N=44°-E）へ屈曲している。長さは17.3mで、上幅0.38~1.71m、下幅0.13~0.52m、深さ23~38cmである。断面形はU字状で、壁は緩斜して立ち上がっていている。

覆土 8層に分層できる。レンズ状の堆積から自然堆積である。

土層解説	1 黒褐色 ローム粒子微量	5 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子微量	6 黒褐色 ローム粒子・今市七本桜バミス中量	
3 黒褐色 ローム粒子微量	7 黒褐色 ローム粒子中量	今市七本桜バミス微量
4 黑褐色 ローム粒子中量	8 黑褐色 ローム粒子中量	今市七本桜バミス少量

遺物出土状況 土器質土器片1点（内耳鍋）のほか、土器片6点（坏2・壺4）、須恵器片6点（坏5・壺1）も出土しているが、いずれも覆土上層から出土しており、流れ込んだものである。

所見 時期は、出土土器から中世と考えられる。底面は低地方向へ傾斜し、斜面部に位置する第2号道路跡に向かって掘り込まれている。廃絶した第2号道路跡の掘り込みを利用した排水溝と考えられる。また、隣接する第1号掘立柱建物跡、第2号柵跡と方向が類似することから、これらの遺構と同時期に機能していた可能性がある。



第21図 第3号溝跡・出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	基積	口径	壁高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴は		出土位置	備考
									長さ	上幅	下幅	深さ
15	土質土器	内耳鏡	—	(5.6)	[10.4]	長石・石英・漂母	明褐色	普通	底部付近を除いた外縁に保付着	覆土中	5%	

表4 中世溝跡一覧表

番号	位置	走行方向	形狀	規 模				壁面	覆土	底面	出土遺物	新旧関係 (旧→新)
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)					
2	A 3 j 1-B 2 h 0	N-30°-E N-58°-W	(L字状)	(39.8)	0.94-2.00	0.24-0.76	33-54	緩斜 外傾	自然 人為	平坦 平坦	土師器、須恵器	本跡→SD 3
3	B 2 d 8-B 2 g 7	N-41°-E N-47°-W N-36°-E	ランク状	17.3	0.38-1.71	0.13-0.52	23-38	緩斜	自然	緩斜	土師器、須恵器、土 質土器	SD 2、SF 2・3→ 本跡

(5) 道路跡

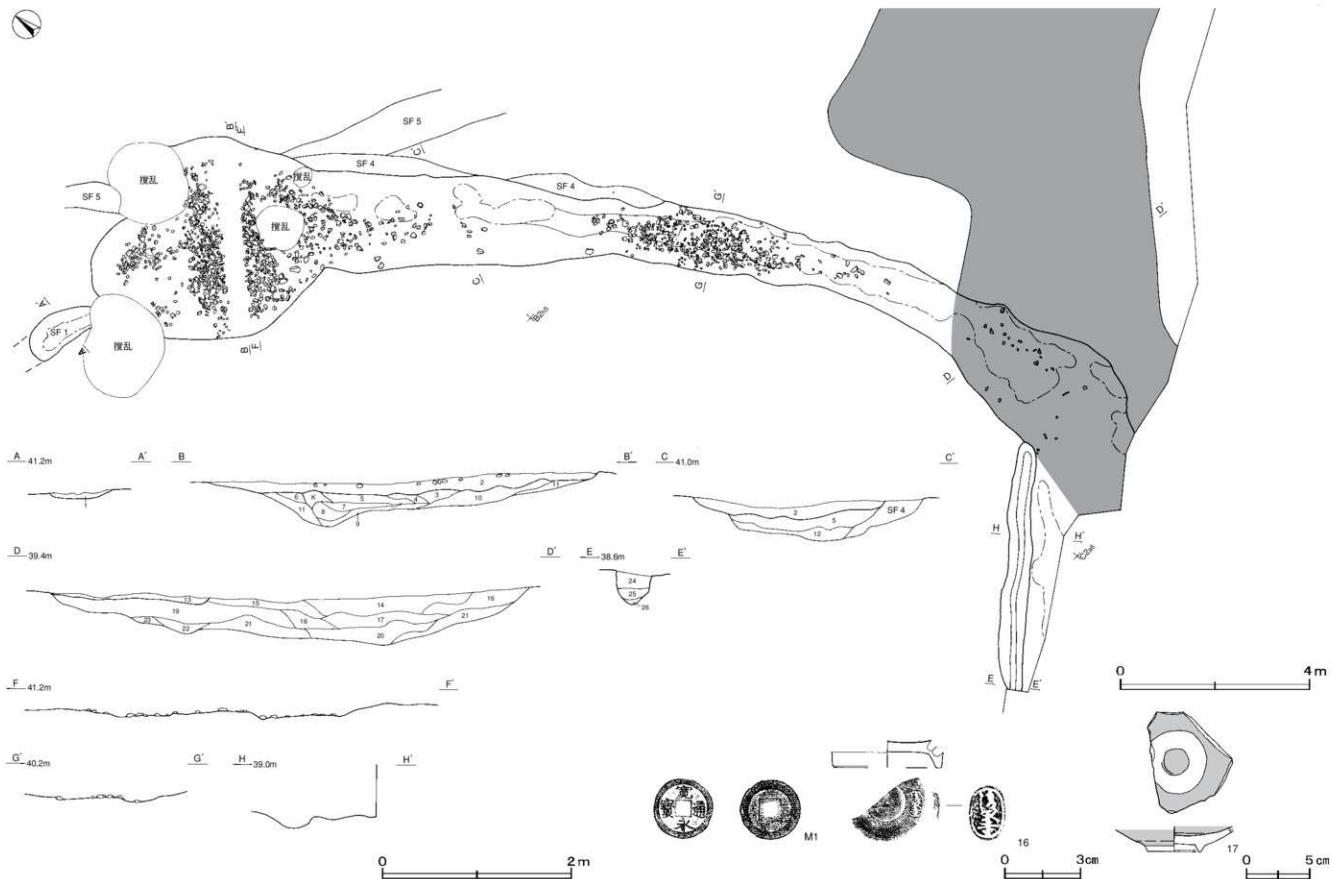
第1号道路跡（第22図）

位置 調査区南部のB 2 f 3-B 2 j 5区、標高38.4~41.1mの台地上から斜面部に位置している。

重複関係 第4・5号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 直線状で、斜面部の傾斜に沿って緩やかに屈曲している。北端は台地部の北西方向へ、南端は調査区域外の低地方向へ延びていると考えられる。確認した長さは27.70mで、上幅1.04~4.28m、下幅0.34~0.58m、深さ3~30cmに掘り込まれている。北端の台地上では、ソフトローム層で硬化面が確認できる。台地端部及び斜面部の一部で、礫が敷設された路面が確認できた。また斜面部には、上幅0.30~0.57m、下幅0.10~0.20m、深さ12~17cmのU字状の側溝が掘られている。

構築土 第1層は覆土である。掘り方底面は第1次路面である。第7~12層は、第1次路面の廃絶後に堆積した覆土である。硬化した第3~6層は第2次路面である。第2層は、砾や遺物を多量に含む路面構築層で、第3次路面である。第14~21層は埋没谷への堆積土であり、これを掘り込んだ第13層は第2・3次路面に続く硬化面である。第22・23層は、第1次路面に続く硬化面である。第1次路面の廃絶後、第19層が自然堆積している。第24~26層は、側溝の覆土である。



第22図 第1号道路跡・出土遺物実測図

土層解説

1	黒	褐色	ロームブロック中量	14	褐	色	ローム粒子中量
2	黒	褐色	ローム粒子微量	15	黒	褐色	ローム粒子少量
3	黒	褐色	ローム粒子微量	16	黒	褐色	ローム粒子少量
4	黒	褐色	ローム粒子微量	17	褐	褐色	ローム粒子少量
5	黒	褐色	ローム粒子中量	18	褐	褐色	ローム粒子少量
6	褐	褐色	ローム粒子少量	19	褐	褐色	ローム粒子中量
7	黒	褐色	ローム粒子中量	20	黒	褐色	ローム粒子中量、酸化鉄粒子少量
8	褐	褐色	ローム粒子中量	21	黒	褐色	ローム粒子中量
9	褐	褐色	ローム粒子微量	22	にぶい黄褐色	ロームブロック中量	
10	黒	褐色	ローム粒子微量	23	褐	褐色	ローム粒子少量
11	褐	褐色	ローム粒子中量	24	黒	褐色	ローム粒子微量
12	黒	褐色	ロームブロック少量（練まりやや強い）	25	褐	褐色	ローム粒子微量
13	褐	褐色	ローム粒子多量	26	にぶい黄褐色	ローム粒子中量	

遺物出土状況 第2層で、巨礫（径256mm以上）8548点、大礫（径64~255mm）1338点、計9886点の礫の敷設を確認した。また、同層からは、繩文土器片2点（深鉢）、弥生土器片1点（壺）、土師器片25点（壺）、須恵器片71点（壺13・高台付壺10・盤2・蓋8・壺37・瓶1）、土師質土器片61点（小皿26・鍋34・鉢1）、常滑系陶器片49点（鉢5・壺44）、瀬戸・美濃系陶器片22点（碗5・鉢12・花瓶1・不明4）、京焼陶器片1点（碗）、產地不明陶器片2点。肥前系磁器片4点（碗1・皿2・瓶1）、石器5点（磨石1・敲石1・砥石3）、石製品1点（碁石）、古銭1点（寛永通宝）、鉄滓1点、計246点の遺物が出土している。これらの礫や遺物は、第3次路面の敷設材として利用されたものである。下層の第3~12層からは、須恵器片6点（高台付壺2・盤1・壺3）、土師質土器片4点（小皿3・鉢1）、常滑系陶器片7点（鉢2・壺5）が出土している。

所見 台地部と低地部を結ぶ道路跡である。第1次路面は、斜面部を浅いU字状に掘り込まれた道路跡である。第2次路面は、第1次路面が廃絶されて、堆積した覆土上部が使用により硬化した道路跡である。第3次路面は、第2次路面上に礫や遺物が敷設された道路跡である。時期は出土遺物や重複関係から、第1・2次路面は16~18世紀前半、第3次路面は18世紀前半以降の近世後半に利用されたと考えられる。本跡の斜面部を登った西脇には第1号塚があり、塚に面して礫が敷設されており、関連が想定される。

第1号道路跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴ほか	断面色 鉢裏色	產地・年代	出土位置	備考
16	陶器	瓶	-	(1.1)	(4.2)	内面灰釉 前出し高台内に「清閑 寺」印款	赤褐色 灰白色	東北・清閑寺 17世紀後半~18世紀前半	第2層	30% PL6
17	繩織	瓶	-	(2.1)	4.1	白繩 素地に黑色粒子・見込み蛇の 目繩調足 高台っぽ無繩	白色	肥前系 18世紀後半	第2層	50% PL5
番号	鉢名	輪外径 (底×頂)	器外縦 (底×頂)	厚さ	重量	材質 削碑年	特徴	出土位置	備考	
M1	寛永通宝	2.41×2.43	0.71×0.68	0.11	2.70	銅 1636年	古銭、無記	第2層	PL6	

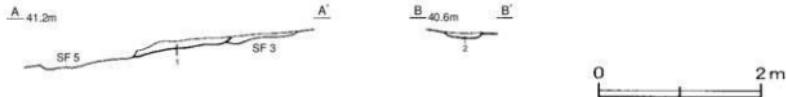
第2号道路跡（第5・23図）

位置 調査区南部のB 2f6~B 2j6区、標高39.2~40.8mの台地端部から斜面部に位置している。

重複関係 第3号道路跡を掘り込み、第5号道路、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 谷津方向へL字状に屈曲している。確認した長さは18.10mであるが、北端は台地部へ、南端は低地部へ続いていると思われる。上幅0.42~1.72m、下幅0.21~1.56m、深さ3~12cmに掘り込まれ、底面全体が硬化している。また第3号溝跡が、本跡の谷津方向の掘り込みと重複しており、本跡の廃絶後は溝として利用された可能性がある。

構築土 第1層は硬化層である。斜面部では、ソフトローム層が硬化している。第2層は覆土で、第3号溝跡の覆土と類似している。



第23図 第2号道路跡実測図

土層解説
1 黒褐色 ロームブロック微量

2 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 流れ込んだ土師器片3点(甕), 須恵器片2点(壺・甕), 土師質土器片1点(小皿)が出土している。

所見 時期は、重複関係から中世と考えられる。台地部と低地部を結ぶ道路跡とみられる。

第3号道路跡 (第5・24図)

位置 調査区南部のB 2f6~B 2h0区、標高40.8mの台地端部に位置している。

重複関係 第2号道路、第3号溝に掘り込まれている。

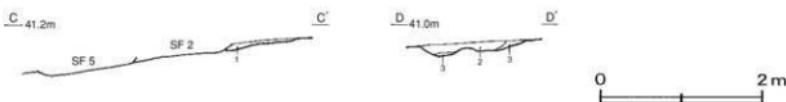
規模と形状 ほぼ直線状で、東端は調査区域外へ延びている。確認した長さは17.20mであるが、西端も台地部へ続いていると考えられる。上幅0.82~1.38m、下幅0.33~0.82m、深さ4~11cmに掘り込まれ、底面全体が硬化している。東部では織状の凹凸が確認できた。

構築土 第1層は硬化層である。東部ではソフトローム層が硬化しており、第2・3層は覆土である。

土層解説
1 黒褐色 ロームブロック微量
2 黒褐色 ローム粒子少量

3 紫褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、重複関係から中世と考えられる。第2号溝跡の方向とほぼ平行することから、同時期に機能していた可能性がある。



第24図 第3号道路跡実測図

第4号道路跡 (第5・25図)

位置 調査区南部のB 2f4~B 2h5区、標高40.6mの斜面部に位置している。

重複関係 第5号道路跡に掘り込み、第1号道路に掘り込まれている。

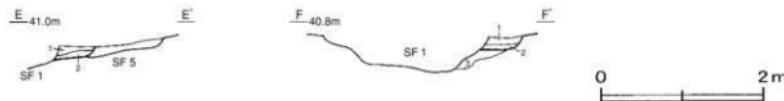
規模と形状 上端の一部がほぼ直線状で確認できた。確認した長さは7.90mで、上幅0.42m、深さ12~38cmに掘り込まれている。

構築土 第1・2層は硬化層で、第3層は掘り方への埋土である。

土層解説
1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量

3 紫褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、重複関係から中世と考えられる。重複のため明確ではないが、第1号道路跡の方向と平行していることから、第1号道路が構築される以前の台地部と低地部を結ぶ道路跡とみられる。



第25図 第4号道路跡実測図

第5号道路跡（第5・26図）

位置 調査区南部のB 2e3～B 2g6区、標高40.5mの台地端部に位置している。

重複関係 第2号道路跡を掘り込み、第1・4号道路に掘り込まれている。

規模と形状 ほぼ直線状で、確認した長さは16.80mである。上幅0.32～1.18m、下幅0.22～0.96m、深さ3～12cmに掘り込まれている。

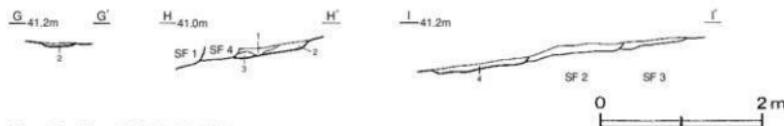
構成土 第1～3層は硬化層である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子中量

3 黑褐色 ローム粒子少量
4 黑褐色 ロームブロック微量

所見 時期は、重複関係から中世と考えられる。第2号道路跡とはほぼ平行であることから、台地部を結ぶ道路跡とみられる。



第26図 第5号道路跡実測図

表5 中・近世道路跡一覧表

番号	位 置	走行方向	形 状	規 模			覆 土	底 面	出土遺物	時 期	新旧関係 (旧→新)
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)					
1	B 2f3～B 2j5	N=35°～W N=52°～E	直線状	(27.70)	1.04～4.28	0.34～0.58	3～30	自然	平担 埴輪状	中世～近世	SF 5→SF 4→本跡
2	B 2f6～B 2j6	L字状	(18.10)	0.42～1.72	0.21～1.56	3～12	自然	平担	土器類、須恵器、土 器買土器	中世	SF 3→本跡→SD 3, SF 5
3	B 2f6～B 2h0	N=67°～W	直線状	(17.20)	0.83～1.38	0.33～0.82	4～11	自然	平担	中世	本跡→SF 2, SD 3
4	B 2f4～B 2h5	N=36°～W	直線状	(7.90)	0.42	—	12～38	—	平担	中世	SF 5→本跡→SF 1
5	B 2e3～B 2g6	N=55°～W	直線状	(16.80)	0.32～1.18	0.22～0.96	3～12	—	平担	中世	SF 2→本跡→SF 4→SF 1

(6) 塚

調査区域内で塚1基を調査した。この他、調査区城外の現道脇の墓地内に1基、北西方向に位置する墓地脇にも塚と思われる高まりが1か所見られる（第1図）。それぞれ台地端部に位置して直線上に並んでおり、関連が想定される。

第1号塚（第27～29図）

位置 調査区南部のB 1j0～B 2h2区、標高40.7mの台地端部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東西径9.84m、南北径は北側が削平を受けているため4.40mしか確認できなかったが、本来は円形であったと推測できる。旧表土面から頂部までの高さは1.03mである。

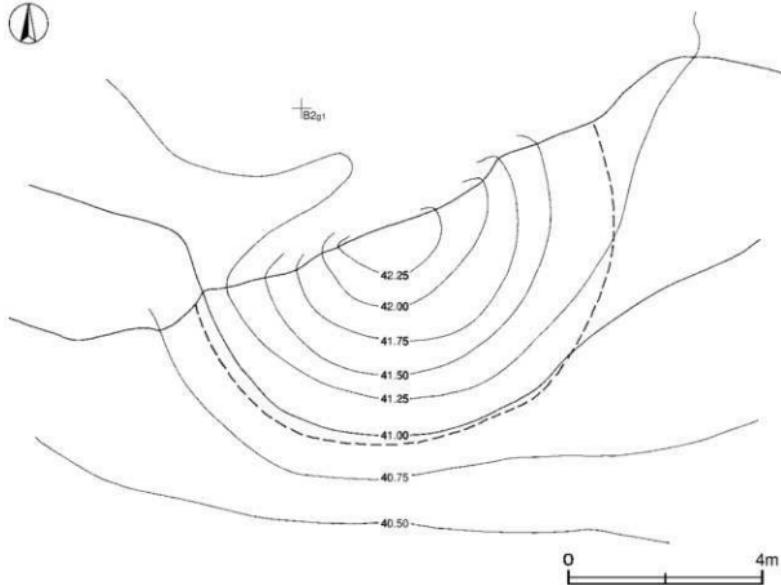
構築状況 27層からなる。ロームブロックを含む黒褐色土を主体として盛土されている。第28・29層の旧表土を基部とし、斜面側は裾部の旧表土をソフトローム層まで掘り込んでいる。塚の外観を高く見せる構築方法と考えられる。

土層解説

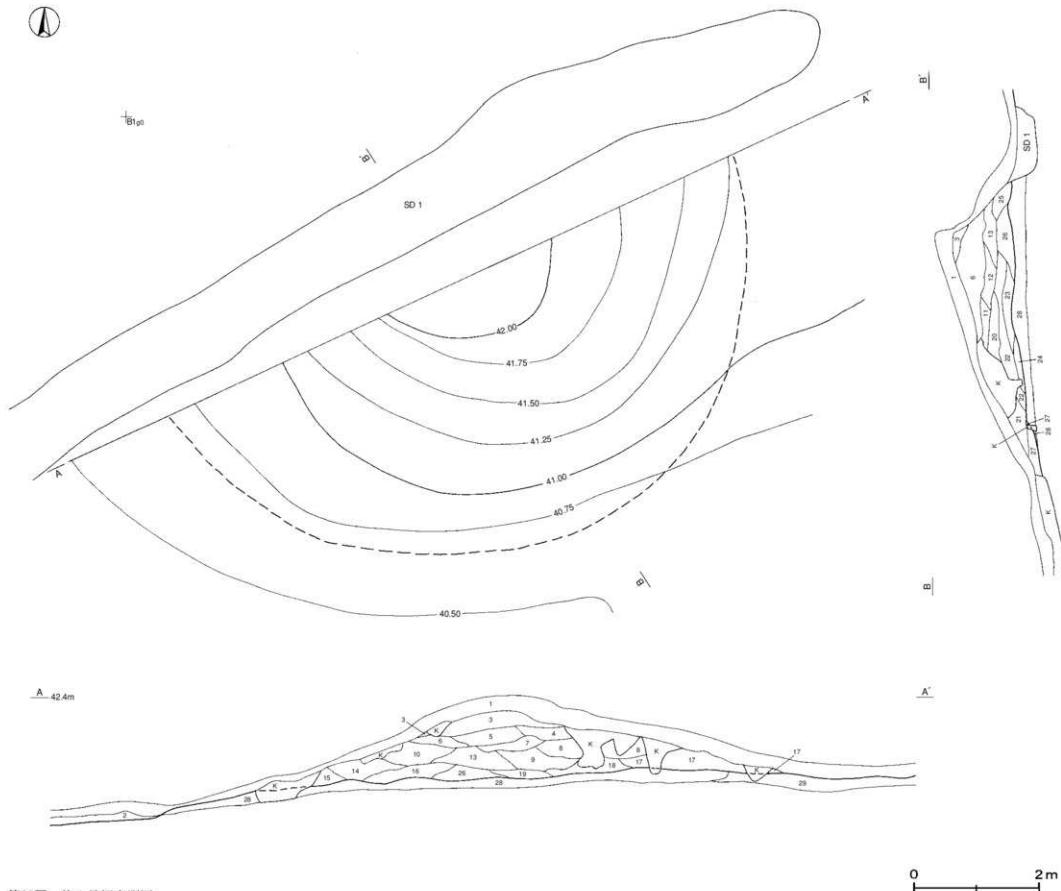
	層	色	表土	
1	黒	褐	色	ローム粒子少量
2	暗	褐	色	ロームブロック少量
3	暗	褐	色	ロームブロック微量
4	黒	褐	色	ロームブロック少量
5	黒	褐	色	ロームブロック・今市七本桙バミス微量
6	暗	褐	色	ロームブロック・今市七本桙バミス微量
7	暗	褐	色	ロームブロック中量、今市七本桙バミス微量
8	暗	褐	色	ロームブロック中量、今市七本桙バミス少量
9	黒	褐	色	ロームブロック微量
10	黒	褐	色	ロームブロック微量
11	黒	褐	色	ロームブロック微量
12	黒	褐	色	ロームブロック少量、今市七本桙バミス微量
13	黒	褐	色	ローム粒子、今市七本桙バミス微量
14	暗	褐	色	ローム粒子少量
15	暗	褐	色	ロームブロック中量、今市七本桙バミス微量
16	黒	褐	色	ロームブロック少量
17	黒	褐	色	ロームブロック微量
18	黒	褐	色	ロームブロック・今市七本桙バミス微量
19	黒	褐	色	ロームブロック少量、今市七本桙バミス微量
20	黒	褐	色	ローム粒子微量
21	暗	褐	色	ローム粒子微量
22	黒	褐	色	ロームブロック微量
23	黒	褐	色	ロームブロック少量、今市七本桙バミス微量
24	黒	褐	色	ロームブロック・今市七本桙バミス微量
25	黒	褐	色	ロームブロック少量
26	黒	褐	色	ロームブロック少量、今市七本桙バミス微量
27	黒	褐	色	ロームブロック中量
28	暗	褐	色	ローム粒子微量
29	暗	褐	色	ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片23点（壺4・鉢1・甕18）、須恵器片21点（壺7・高台付壺3・甕11）、土師質土器片3点（小皿・火鉢・鍋）、陶器片3点（大皿1・甕2）、石器1点（砥石）、鐵滓1点が出土しているが、いずれも盛土の際に混入したものである。

所見 時期は、出土遺物や構築状況から15～16世紀代と考えられる。なお、調査区域の周辺地は赤羽根経塚と呼ばれているが、当塚との関係は不明である。



第27図 第1号塚調査前現況図



第28図 第1号坂実測図



第29図 第1号塚出土遺物実測図

第1号塚出土遺物観察表（第29図）

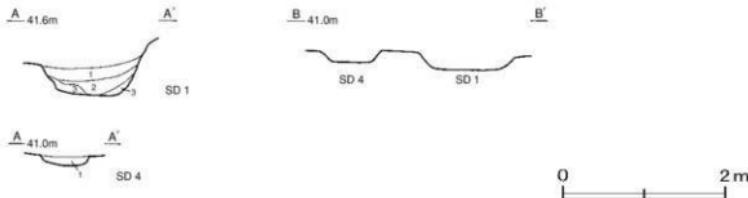
番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴ほか	胎土色 胎土色	产地・年代	出土位置	備考
18	陶器	大皿	—	(2.6)	(7.8)	灰釉 体部下部に足状の貼唐	淡黄 白色	瀬戸・美濃系 14世紀後半～15世紀前半	盛土中	5% PL.5
TP 2	土師質土器	火鉢	長石				灰黄 良好 外面黑色処理 花文スタンプ押捺 沈欄文		盛土中	5% PL.6

4 その他の造構と遺物

遺物が出土していないなど、時期を決定できない造構として、溝跡2条、土坑9基、ピット8か所がある。以下、実測図と一覧表を掲載する。

(1) 溝跡（第5・30図）

溝跡2条は筆境に位置しているため、根切り溝と考えられる。ここでは一覧表、土層断面図を掲載し、平面図は造構全体図で掲載する。



第30図 時期不明溝跡実測図

第1号溝跡土層解説

- 1 黒 極色 ローム粒子微量
- 2 黒 極色 ローム粒子少量
- 3 黒 極色 ロームブロック少量

第4号溝跡土層解説

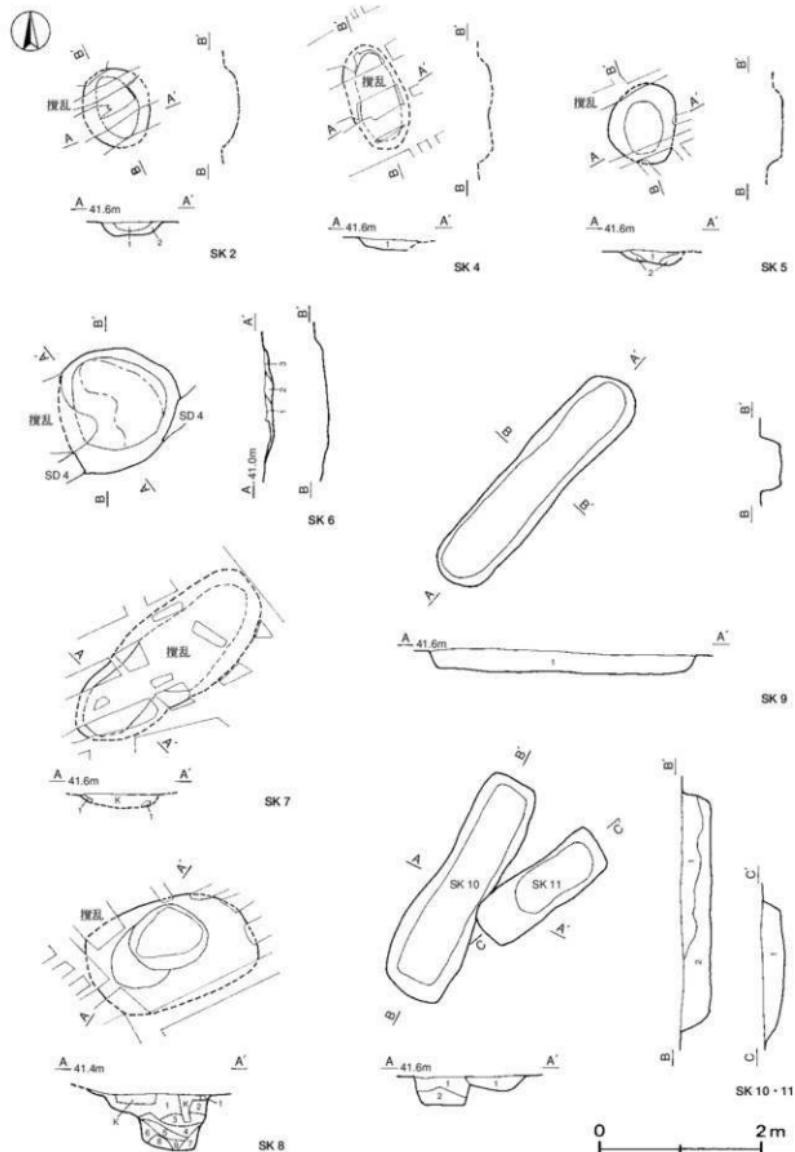
- 1 黒 極色 ローム粒子少量

表6 時期不明溝跡一覧表

番号	位 置	走行方向	形 状	規 模				壁面	覆土	底面	出土遺物	新旧關係 (旧→新)
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)					
1	B 1 b8～B 2 i7	N-60°-E	直線状	(18.20)	1.08-1.60	0.50-1.10	20-35	礫斜	自然	砾状		TM 1→本跡
4	B 2 d8～B 2 g7	N-55°-E	直線状	21.42	0.21-0.72	0.14-0.48	7-11	礫斜	自然	砾状	土師器、瓦	SK 6→本跡

(2) 土坑（第31図）

土坑9基について実測図、一覧表を掲載する。



第31図 時期不明土坑実測図

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子中量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
2 黑褐色 ローム粒子少量

第5号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量
2 黑褐色 ローム粒子中量

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
2 黑褐色 ローム粒子少量
3 黑褐色 ローム粒子中量

第7号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量

第8号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子・今市七本桙バシス中量
3 黑褐色 ローム粒子中量
4 黑褐色 ローム粒子多量
5 黑褐色 ローム粒子少量
6 暗褐色 ローム粒子多量
7 黑褐色 ローム粒子中量
8 黑褐色 今市七本桙バシス多量、ローム粒子中量
9 黑褐色 ローム粒子多量

第9号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック中量

第10号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量
2 黑褐色 ロームブロック中量

第11号土坑土層解説

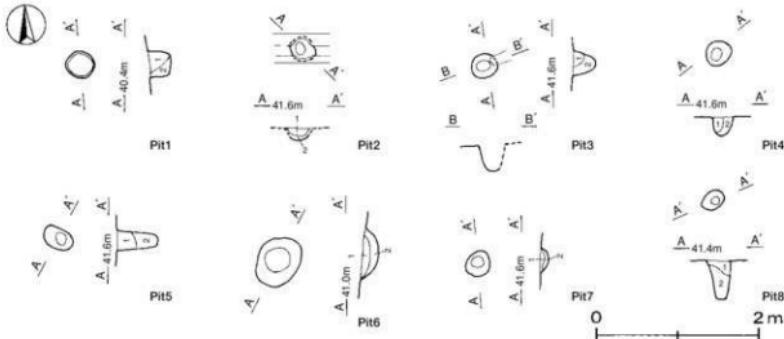
- 1 黑褐色 ロームブロック少量

表7 時期不明土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	断面 (m. 深さ12cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新田關係 (旧→新)
				長径(輪) × 短径(輪)	深さ					
2	A 2e3	N-23°-W	楕円形	1.00 × 0.86	18	縦斜	平坦	自然		
4	A 2e4	N-15°-W	楕円形	[1.33] × [0.68]	15	縦斜	平坦	自然		
5	A 2g3	N-6°-E	楕円形	1.00 × 0.82	16	縦斜	平坦	自然		
6	B 2f2	N-32°-W	円形	1.50 × 1.50	18	縦斜	平坦	自然		底面硬化 本跡→SK4
7	A 2h7	N-49°-E	楕円形	[2.78] × [1.16]	14	縦斜	平坦	自然		
8	A 2i9	N-68°-E	楕円形	1.84 × [1.31]	68	外傾	平坦	人為		
9	B 3d3	N-41°-E	圓角方形	3.24 × 0.70	27	外傾	平坦	人為		手穴#
10	B 3b1	N-27°-E	長方形	2.97 × 0.74	34	外傾	平坦	人為		手穴# 本跡→SK11
11	B 3b1	N-50°-E	長方形	1.77 × 0.62	35	外傾	平坦	人為		手穴# SK10→本跡

(3) ピット (第32図)

ピット8か所について、実測図、一覧表を掲載する。なお、第6号ピットは、第1号塚の盛土除去後、ソフトローム面で確認したものである。



第32図 時期不明ピット実測図

第1号ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
2 褐色 ローム粒子多量

第2号ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子少量

第3号ピット土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子少量

第4号ピット土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量
2 黑褐色 ロームブロック少量

第5号ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。今市七本桜バシス微量
2 黒褐色 ローム粒子中量。今市七本桜バシス少量

第6号ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子中量

第7号ピット土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量
2 黑褐色 ローム粒子・今市七本桜バシス中量

第8号ピット土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子中量
2 褐色 ローム粒子多量。今市七本桜バシス中量

表8 時期不明ピット一覧表

番号	形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	円形	35	32	30	4	円形	32	30	24	7	楕円形	32	29	11
2	[円形]	[31]	[28]	19	5	楕円形	39	25	32	8	楕円形	30	23	47
3	円形	31	30	34	6	楕円形	63	50	25					

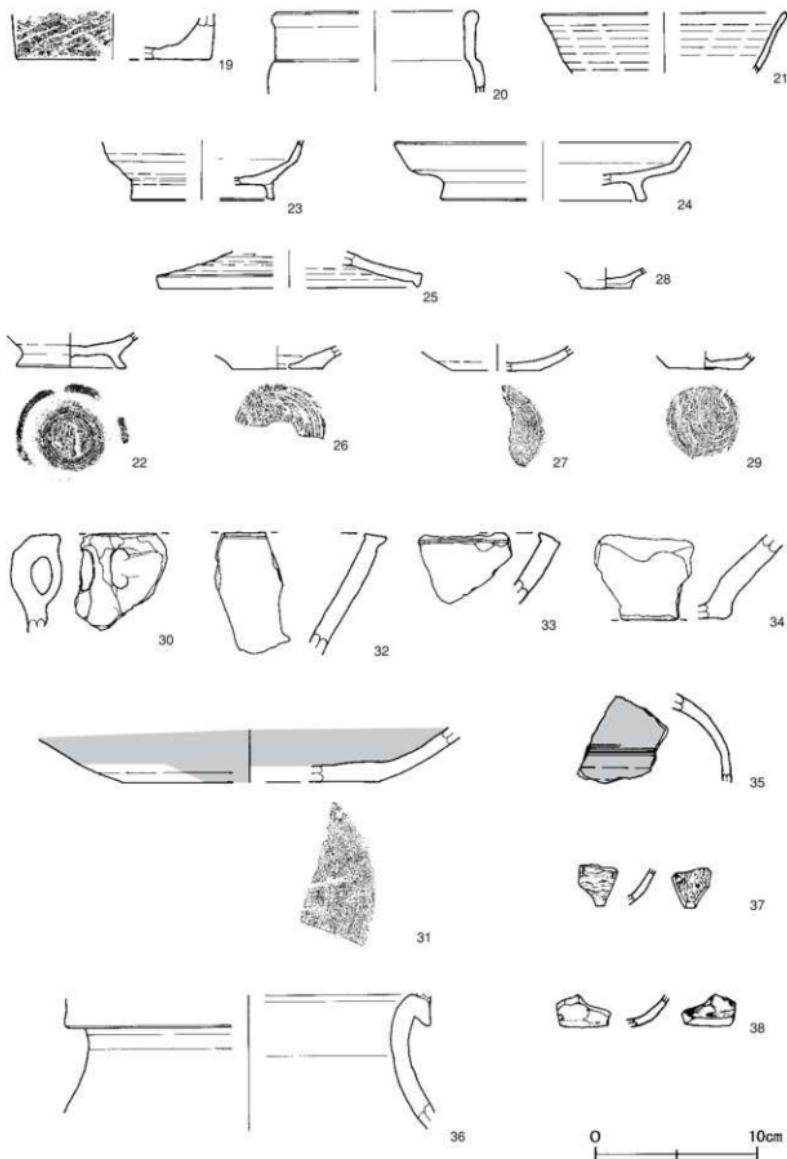
(4) その他の出土遺物（第33・34図）

遺構外出土遺物のほか、遺構内から出土したが遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。19・22~28・30~34・36、TP4~8・11、Q3・5~7、M2は、第1号道路跡の第3次路面に混入していたものである。

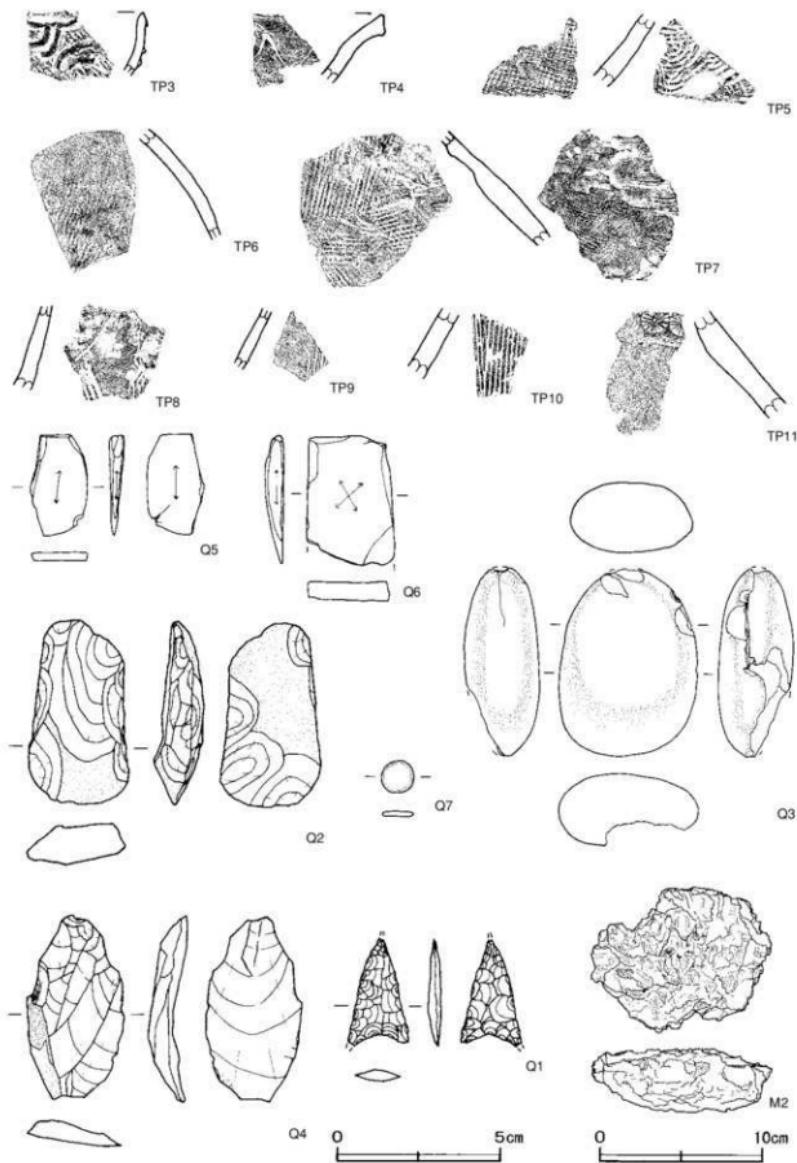
遺構外出土遺物観察表（第33・34図）

番号	種類	断面	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
19	佛坐土器	座	-	(2.8)	[11.6]	長石・石英	にぶい黄褐	普通	陶加和1種模文	SF1 第2層	30%
20	土器	鉢	[12.4]	(5.0)	-	長石	にぶい褐	好外	外腹擦痕ヘア剥き	TM1 地下中	5%
21	須恵器	环	[15.0]	(3.7)	-	長石・石英	オオリープ	直好		SL2 第2層	5%
22	須恵器	高台付环	-	(2.2)	6.6	長石・石英	灰青	普通	底部回転ヘア切り 高台付	SF1 第2層	60%
23	須恵器	高台付环	-	(3.7)	[8.6]	長石	暗灰黄	直好	底部回転ヘア切り 高台付	SF1 第2層	30%
24	須恵器	瓶	[18.0]	3.5	[12.5]	長石	灰白	直好	底部回転ヘア切り 瓶付高台	SF1 第2層	30%
25	須恵器	盖	[15.8]	(2.2)	-	長石	灰	直好	瓶付底部ヘア割り	SL2 第2層	10%
26	土師質土器	小皿	-	(1.3)	[5.6]	長石・雲母	にぶい褐	普通	ロクロ成形 内面擬方角ナデ 底部回転系切	SF1 第2層	50%
27	土師質土器	小皿	-	(1.5)	[5.4]	長石・石英・墨	褐	普通	ロクロ成形 底部回転系切	SF1 第2層	40%
28	土師質土器	小皿	-	(1.3)	[4.6]	長石・石英・墨	浅黄褐	普通	ロクロ成形 瓶付高台	SF1 第2層	50%
29	土師質土器	小皿	-	(1.1)	4.6	長石・雲母	黄褐	普通	右回輪ロクロ成形	SL2 表上	50%
30	土師質土器	内耳罐	-	(6.0)	-	長石・石英・墨	灰黄褐	普通	耳貼付	SF1 第2層	5% PL6

番号	種類	断面	口径	部高	底径	手法の特徴はか	胎土色	胎土色	胎土色	出土位置	備考
31	陶器	深皿	-	(3.3)	[15.6]	底部回転ヘア切り 灰褐色	トナン灰	褐色	茶褐色	SF1 第2層	25%
32	陶器	鉢	-	(7.4)	-	内面摩減	にぶい赤褐色	茶褐色	茶褐色	SF1 第2層	5%
33	陶器	鉢	-	(4.4)	-	口唇部洗滌	にぶい赤褐色	茶褐色	茶褐色	SF1 第2層	5%
34	陶器	鉢	-	(5.2)	-	内面摩減	茶褐色	茶褐色	茶褐色	SF1 第2層	5% PL6
35	陶器	瓶	-	(5.4)	-	灰褐色 楊汀文	オリーブ灰	褐色	褐色	A2区 14世紀後半	5%
36	陶器	瓶	-	(8.2)	-	N字状縫跡	赤褐色	茶褐色	茶褐色	SF1 第2層	5% PL6
37	陶器	瓶	-	(2.3)	-	外面部磨耗凹	内面打磨凹	暗褐色	茶褐色	A2区 12世紀末~13世紀中	5% PL5
38	器	瓶	-	(2.0)	-	内・外面部磨耗	灰白	茶褐色	茶褐色	B3区 表上	5% PL5



第33図 遺構外出土遺物実測図(1)



第34図 遺構外出土遺物実測図(2)

番号	種類	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP3	绳文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	単面繩文出し後縁帶粘付	B2区 表土	5% PL.6
TP4	須恵器	壺	長石・雲母	黄灰	良好	外面波状文	SF1 第2層	5%
TP5	須恵器	壺	長石・石英	浅黄	普通	外面横格子目口き 内面同心円文の当て具模	SF1 第2層	5%
TP6	須恵器	壺	長石	灰	良好	外面平行叩き 粘土付着 内面ハケ状工具に よるナゴ	SF1 第2層	5%
TP7	須恵器	壺	長石・雲母	灰青褐	普通	外面平行叩き 粘土付着 内面ハケ状工具に よるナゴ	SF1 第2層	5%
TP8	土師質土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	普通	1耳目3条以上の捺り目	SF1 第2層	5%
TP9	陶器	深鉢	黑色粒子	暗赤褐	良好	内・外面跳釉 1耳目6条以上の捺り目	A2区 表土	5% 無漆系
TP10	陶器	深鉢	長石	にぶい赤褐	良好	1耳目8条以上の捺り目	A2区 表土	5% 明石・標準系
TP11	陶器	壺	長石	にぶい赤褐	良好	外面刷毛文スチップ押捺	SF1 第2層	5% 常滑系 PL.6

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	石鏡	0.30	1.9	0.4	(2.2)	チャート	押住網織彫	A2区 表土	PL.6
Q2	打撲石斧	11.4	6.2	3.0	220.5	ホルンフェルス	自然面あり	B2区 表土	PL.6
Q3	敲石	(1.6)	8.5	4.6	(520.0)	安山岩	上下に敲打痕	SF1 第2層	PL.6
Q4	剥片	5.7	3.0	1.2	13.7	瑪瑙	細長剥片 打痕	A2区 表土	PL.6
Q5	敲石	6.2	3.5	0.9	25.6	粘板岩	紙面3面	SF1 第2層	PL.6
Q6	敲石	(8.0)	5.4	1.2	(72.4)	頁岩	紙面2面 欠損あり	SF1 第2層	PL.6
Q7	敲石	2.0	2.0	0.4	2.4	頁岩	にぶい黄褐色の白石 全面研磨	SF1 第2層	PL.6

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
M2	鐵滓	9.0	11.0	3.9	300.0	複数点	SF1 第2層	PL.6

第4節 まと め

今回の調査によって、古墳時代から中・近世にかけての遺構が確認され、集落跡であることが判明した。なお、今回の調査区域では、遺跡名となっている旧宝輪院跡は確認できなかった。以下、各時期の様相と、旧宝輪院に関する史料をまとめることとする。

1 古墳時代

7世紀前半の第2号住居跡が確認できた。調査区内で確認できた当時期の住居跡は1軒であるため、集落の縁辺部にあたると思われる。

当遺跡と谷津を挟んで対面する十万原台地では、二の沢A遺跡、二の沢B遺跡¹⁾など5遺跡が調査され、前期に広範囲に集落が営まれていることが判明している。しかし、これらの遺跡群は中期からは衰退し始め、ニガサワ遺跡²⁾では中期の住居跡が10軒、後期が1軒と減少し、十万原遺跡³⁾では5世紀末で集落が途絶えてしまう。ニガサワ古墳群¹⁾では前期に集落が消滅した後、6世紀後半から7世紀前半にかけて、5基の古墳が構築されている。十万原台地で集落が衰退する一因として、集落が営まれた地が墓域へと変遷し、これに伴って集落が対岸などの周辺部へ移動した可能性が考えられる。

2 奈良・平安時代

8世紀後半の第1号住居跡、第3号住居跡の2軒が確認できた。十万原台地では平安時代になって再び集落が形成されているが、対岸にも集落が営まれていたことが判明した。第1号住居跡では、木葉下窓産と思

われる完形の坏が床面に遺棄され、住居人が人为に埋め戻されたことが確認できた。住居跡は斜面に近い台地端部で確認されたことから、集落が西田川左岸の台地端部に広がっている可能性がある。

3 中·近世

(1) 史料から見た旧宝幢院

泉山宝輪院宝嚴寺は、城里町那珂西字台街道東に所在する真言宗豈山派に属する寺院である。1396(応永3年)佐久山淨瑞鑑光寺二世の上宥が、那珂西字赤羽根に開山したといわれている。1696(元禄9年)徳川光圀の願により以伝僧正を招いて、現在位置している那珂西城跡に移転し再興されたといわれている。本堂の大日如来坐像の体内修理銘には、本像がかつて石塚に所在した白馬寺より移され、光圀によって修理が行われたことが記されており⁴⁾、水戸藩との関わりがうかがえる。現宝輪院には移転に関する史料は存在していないが、関連史料や文献を整理し、旧宝輪院跡の位置について検討したい。

城里町上入野の小松寺には、宝幢院に関する史料が伝えられている。「願流血脈」⁵⁾には、「上有或抄云。智空上人ト号ス。(中略) 佐久山院家有尊ニ授與有。佐久山近所泉ト云所ニ閑居シ玉フ。今宝幢院是也」との記述があり、上有が弟子の有尊に法を授け、自身は「泉」と呼ばれる地に移住したことがうかがえる。有尊の部分には「上有法印ハ泉ト云所ニ院家ヲ建立シ、無程三ヶ年ノ後、有尊エ寫瓶遺告有テ之入滅ス」とあり、上有が宝幢院に移住して3年後に没したこともうかがえる。また、1422(応永29)年の「宥尊授尊有印信」⁵⁾には「常州那珂西泉壇場授與畢」とあり、旧宝幢院を泉壇場と記している。

「順流行血脉」に見える「佐久山院家」は、佐久山淨瑠璃光寺（現在の佐久山薬師寺）を指すとみられ、佐久山は大字石塚の小字名にもなっている。しかし、付近に「泉」と呼ばれる地名は現存していない。

「泉」に関する史料として、1362(康安2)年の「佐竹義篤譲状」⁶⁾がある。ここに「那珂西下泉村」とあり、那珂西部に下泉と呼ばれた地名があったことがうかがえる。この地名も現存していないが、字佐



第35図 旧常北町大字・小字位置図(常北町史編さん委員会「常北町小字地図」より改変・掲載)

久山が位置する大字石塚に接して大字上泉が地名に見られる。また郡河西は、かつては中泉村、下泉村に分かれていた可能性も紹介されており⁶⁾、「泉」は上泉、中泉、下泉の一帯を指し、現在の郡河西もこれに含まれると考えられる（第35図）。また、宝幢院の泉山と称される山号も、「泉」の地名に由来する可能性が考えられる。

宝幢院に関連する近世史料として、1663（寛文3）年の水戸藩の寺社整理資料である「開基帳」⁶⁾が挙げられる。この史料は、現在地に移転したといわれる1696年以前のものである。当時、郡河西は上郡河西村、下郡河西村に分かれており、上郡河西村の部分に宝幢院が記されている。なお、ここでは開山を1369（応永2）年としている。また、上泉村の部分では千手院、泉藏院など宝幢院の末寺が記されている。

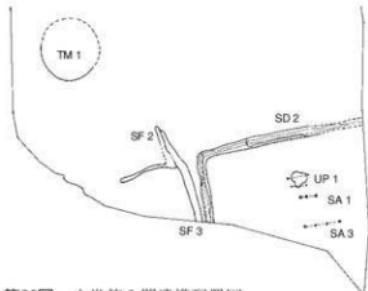
これらの史料や研究からは、「泉」と旧宝幢院跡に比定されている赤羽根の地名を直接結ぶことはできないが、旧宝幢院が郡河西のどこかに位置していた可能性がある。また、郡河西道場に宝幢院僧侶の修行場があったといわれており⁷⁾、旧宝幢院との関連が想定される。

(2) 遺構・遺物から見た旧宝幢院跡

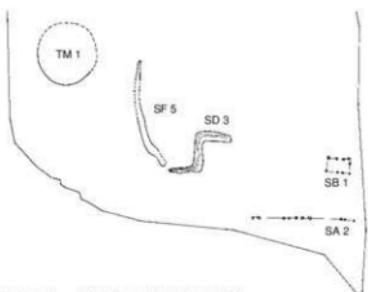
当時代の遺構として、掘立柱建物跡1棟、横跡3列、地下式坑1基、溝跡2条、道路跡5条、塚1基が確認できた。第1号掘立柱建物跡は小規模であるため、納屋などの付属施設の可能性がある。第1号地下式坑の周囲ではピットが確認できた。上屋に関連するピットが明確でないが、このような事例として、水戸市白石遺跡の第21号地下式坑などがあり、上屋の可能性が指摘されている⁸⁾。第1号塚は、瀬戸・美濃系大皿片⁹⁾、土師質土器の火鉢片から、15~16世紀代に構築されたとみられる。これに隣接する第1号道路跡は中世から近世にかけての道路跡で、3面の路面が確認できた。第3次路面では、多量の穀や肥前系磁器片¹⁰⁾などの遺物が塚の前面を中心に敷設されており、塚との関連が考えられる。また、京都市清閑寺窯産の京焼陶器片が出土しており、江戸市中では武家屋敷跡からの出土が多い傾向と、郊外での寺院跡からの出土が指摘されている¹¹⁾。

ここでは、出土遺物がない遺構もあるため推測の域を出ないが、遺構の構築方向と重複関係から遺構を時期毎に分け、中世の景観を復元してみた。時期は15~16世紀の中で、以下のように大きく3時期（第I~III期）に分かれると考えられる。

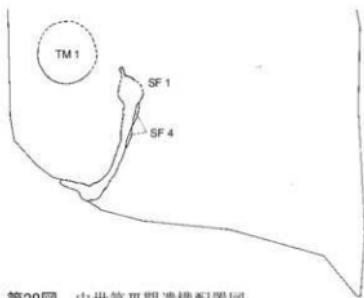
第I期の遺構として、第1・3号横跡、第2号溝跡、第3号道路跡がある（第36図）。また、15世紀代と考えられる第1号地下式坑の周間に位置するピットの方向も、この時期の構築方向と類似している。溝が調査区域外に延びているため明確ではないが、溝で方形に区画された居住地の一部と、この区画に沿う道路跡と推測できる。また、第3号道路跡を掘り込む第2号道路跡も、この時期に



第36図 中世第I期遺構配置図



第37図 中世第II期遺構配置図



第38図 中世第Ⅲ期遺構配置図

近接する時期の台地部と低地部を結ぶ道路跡と考えられる。

第Ⅱ期の遺構として、第1号掘立柱建物跡、第2号構跡、第3号溝跡がある（第37図）。第Ⅰ期の構築方向よりも東方向に振れている。台地上には、小規模な建物と柵が配置された景観と推測できる。溝は北東方向へ延びていないため、明確な区画は確認できない。また、廃絶された第2号道路跡の掘り込みが、排水溝として機能していた可能性がある。第5号道路跡は、第Ⅰ期の第3号道路跡と同様、台地部を結ぶ道路跡と考えられる。

第Ⅲ期の遺構として、第5号道路跡を掘り込む第4号道路跡と、近い時期に掘り直されたと考えられる第1号道路跡の第1次路面がある（第38図）。台地部と低地部を結ぶ道路跡とみられる。

今回の調査区域では寺院跡は確認できなかったが、調査区域外では塚と思われる高まりがあり、畠地から土師質土器片や、常滑系、瀬戸・美濃系陶器片などの遺物が出土していることから、調査区域周辺に中・近世の遺構が広がっていると思われる。このような状況も、調査区域周辺が旧宝幢院跡に比定されたことに関わっている可能性が考えられる。

註

- 江幡良夫・黒澤秀雄「十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 二の沢A道路 二の沢B道路（古墳群）ニガサワ古墳群」「茨城県教育財团文化財調査報告」第208集 2003年3月
- 小林孝「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書 I ニガサワ遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第169集 2000年3月
- 皆川修「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書 II 十万原遺跡1」「茨城県教育財团文化財調査報告」第179集 2001年3月
宮田和男「都市計画道路藤井橋十万原線改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 十万原遺跡2」「茨城県教育財团文化財調査報告」第193集 2002年3月
- 桐原治美「茨城の仏教造像—みほとけの情景とまなざし—」茨城県立歴史館 2004年10月
- 茨城県史編さん中世史部会「茨城県史料 中世編II」茨城県 1974年3月
- 常北町史編さん委員会「常北町史」常北町 1988年3月
- 常北町史編さん委員会「常北町小字地図」常北町 1984年2月
- 櫻村宣行（仮称）「水戸淨水場地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第82集 1993年3月
房能中近世考古学研究会「全国地下式坑渠集成資料集」2007年2月
- 藤澤良祐「瀬戸系（施釉陶器生産技術の伝播）」「中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 発表要旨集」中央大学文学部日本史学研究室 2005年9月
- 中野雄二「江戸後期における波佐見諸窯と長与皿山窯の磁器生産」「江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 九州近世陶磁学会 2006年2月
- 及川登「江戸遺跡における京都・信楽系製品の流通について」「江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－」江戸遺跡研究会 1999年1月

参考文献

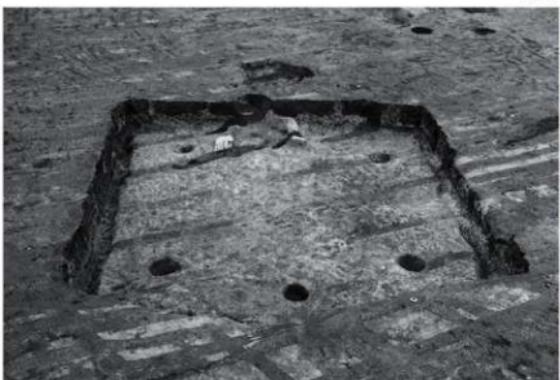
- 小河邦男・川井正一「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書8 木戸下遺跡II（窓跡）」「茨城県教育財团文化財調査報告」第26集 1984年3月
川根正教・石川功・植木真吾「寛永通宝銅錢の形態的特徴と金属成分分析」「日本考古学」第20号 日本考古学協会 2005年10月
九州近世陶磁学会「九州陶磁の編年」2000年2月
中世史専門委員会「茨城県史 中世編」茨城県 1986年3月
山本賢一郎・松田政基「三村山振豪寺跡道路群」「つくば市教育委員会 1993年3月

写 真 図 版



第1号道路跡出土状況

第 2 号 住 居 跡
完 壴 狀 況



第 2 号 住 居 跡
完 壴 狽 況



第 1 号 住 居 跡
完 壴 狽 況



PL. 2



第1号住居跡
遺物出土状況



第1・2・3号構跡
完掘状況



第1号地下式坑
完掘状況

第 2 号 沟
完 壕 状 況



第 1 号 道 路 跡
第 1 次 路 面 完 壕 状 況



第 1 号 道 路 跡
砾 出 土 状 況



PL. 4



第 1 号 道 路 跡
礫 出 土 状 況



第 1 号 塚
調 査 前 確 認 状 況

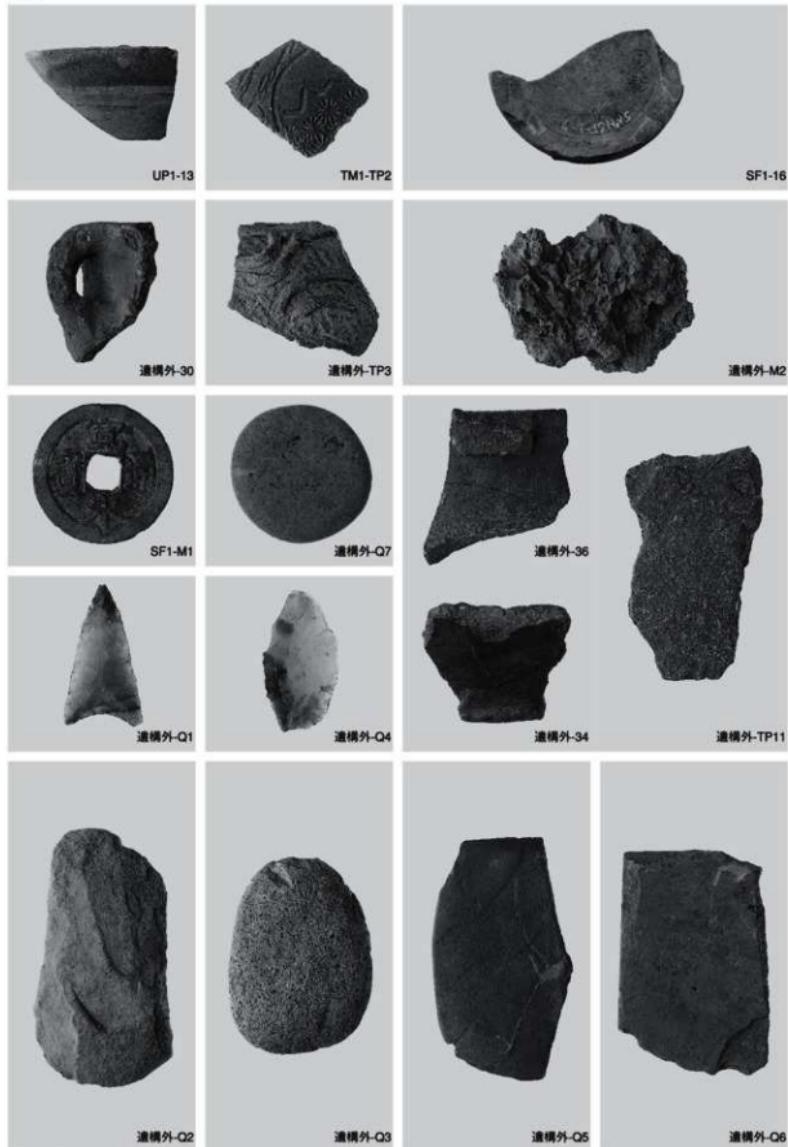


第 完 1 号 塚
掘 狀 況



出土遺物 (1)

PL. 6



出土遺物 (2)

抄 錄

茨城県教育財団文化財調査報告第316集

旧宝幢院跡

一般県道城里那珂線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21（2009）年3月18日 印刷
平成21（2009）年3月23日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 高野高速印刷
〒310-0853 茨城県水戸市平須町1822-122
TEL 029-305-5588